三重県埋蔵文化財調査報告161

# 東海道遺跡（第２次）発掘調査報告

１９９７・３

三重県埋蔵文化財センター

図版１　阿児町国府地区航空写真（伊勢新聞社提供）　　撮影　1983（昭和58）年

# 序

近年、三重県はもとより全国各地から貴重な埋蔵文化財発見のニュースが多数聞かれるようになりました。中には歴史を書き換えるような大発見で、全国民の注目となるものもあり、年々、関心の度合いを増しております。

何故このように多数、埋蔵文化財発見の報が届くようになったのかを考えてみれば、それは、広大な面積のほ場整備事業や道路の新設・改良あるいは河川改修などの公共事業、また、民間企業による開発事業などに伴う発掘調査増加の結果に外なりません。これらの事業が、経済の活性化あるいは国民の生活向上のため必要不可欠であることは言うまでもありません。しかし、発掘調査が終了すれば、それぞれの目的に沿って事業が行われ、貴重な遺跡はその姿を失います。このような状況の中で、三重県教育委員会では、文化財保護行政の立場から、それぞれの事業予定地内の文化財の確認及び保護に努めておりますが、現状保存困難な部分については、発掘調査を実施し、記録保存することとしております。

ここに調査結果を報告する東海道遺跡は、1988（昭和６３）年に磯部大王自転車道整備事業に伴い第１次調査が実施されており、今回、この自転車道に並行する主要地方道磯部大王線県単道路改良事業に伴い第２次調査が実施されたものであります。

こうして記録保存された貴重な文化財を後世に伝え、今後の文化向上の一助と為すことが、重大な責務であると痛感しております。

なお、調査にあたっては、県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会並びに同町建設課をはじめ、地元の多くの方々から惜しみないご理解とご協力を賜りました。文末ながら、記して深く感謝の意を表します。

1997（平成９）年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　奥　村　敏　夫

# 例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、主要地方道磯部大王線県単道路改良事業に伴い発掘調査を実施した志摩郡阿児町国府字下ノ東・阿し原に所在する東海道遺跡（第２次調査）の発掘調査報告書である。

2．調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査第一課　主事　佐藤　公

技師　西村美幸

3．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の者が補助した。執筆・編集は主に佐藤が行い、西村が補佐した。遺物の写真撮影は佐藤が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、楠　純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子

4．当報告書作成にあたって、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏より御教示頂きました。記して感謝申し上げます。

5．調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会、阿児町建設課、並びに地元の方々からのご協力を得た。

6．挿図の方位は、全て真北で示している。（現地で磁北で測ったものを真北に換算）なお、磁針方位は西偏6°40′（平成６年、国土地理院）である。

7．写真図版の遺物番号は実測図の番号と対応させてある。

8．東海道遺跡（第２次調査）の遺構実測図・遺物実測図や写真等の資料及び出土遺物はすべて、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．本書で用いた遺構番号は、通番となっている。

また、番号の頭には、各遺構の性格により以下の略記号を付けた。

ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　ＳＺ：落ち込み　　Ｐ：ピット（小穴）

10.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本　文　目　次


Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 4
Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－ …… 5
Ⅳ　調査の成果－出土遺物－ ……12
Ⅴ　結　語 ……19


# 挿　図　目　次


第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡周辺位置図 …… 3
第３図　調査区位置図 …… 4
第４図　調査区土層断面図（１） …… 7
第５図　調査区土層断面図（２） …… 8
第６図　調査区平面図（Ａ区・Ｂ区） …… 9
第７図　調査区平面図（Ｃ区・Ｄ区） ……10
第８図　Ａ区　ＳＤ29胴木・杭出土状況図 ……11
第９図　Ｃ区　ＳＤ37胴木・杭出土状況図 ……12
第10図　出土木製品実測図 ……14
第11図　出土遺物実測図（１） ……17
第12図　出土遺物実測図（２） ……18
第13図　出土貨幣拓影 ……19


# 表　目　次


第１表　出土遺物観察表（１） ……15
第２表　出土遺物観察表（２） ……16


# 写　真　図　版　目　次


図版１　阿児町国府地区航空写真 ……巻頭
図版２　調査区遺構、出土遺物（１） ……20
図版３　出土遺物（２） ……21

# Ⅰ　前　言

## 1　調査の契機

主要地方道磯部大王線県単道路改良事業（以下、「磯部大王線」）は、一般地方道安乗港線（通称安乗港バイパス）に接続する形で進められている。

これに先立つ1987（昭和62）年、磯部大王自転車道（以下、「自転車道」）が計画された際に、遺跡の有無を確認するため、県教育委員会事務局文化課が阿児町国府字東海道・一色[1]の事業予定地内の分布調査を行った。その結果、遺物の散布が見られさらに試掘調査を行い、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構・遺物が認められたため、県土木部道路建設課及び志摩土木事務所と協議を行い、1988（昭和63）年9 月～10月、発掘調査が実施されるに至った（以下、「第１次調査」）。

磯部大王線は、この自転車道の西側に並行する荒れ地及び町道部分に計画された。

当三重県埋蔵文化財センターでは、第１次調査の結果に加え、1994（平成6）年5月及び12月の2回に分けて、事業予定地の試掘調査を実施し、その結果に基づいて協議を行い、道路センター杭No31からNo41について、発掘調査（以下、「第２次調査」）を行うこととなった。

## 2　調査の経過

### (1)　概要

調査は、1996（平成８）年９月17日に開始し、12月４日にすべてを終了、同日、志摩土木事務所に引き渡しを行った。調査面積は1,800㎡であった。

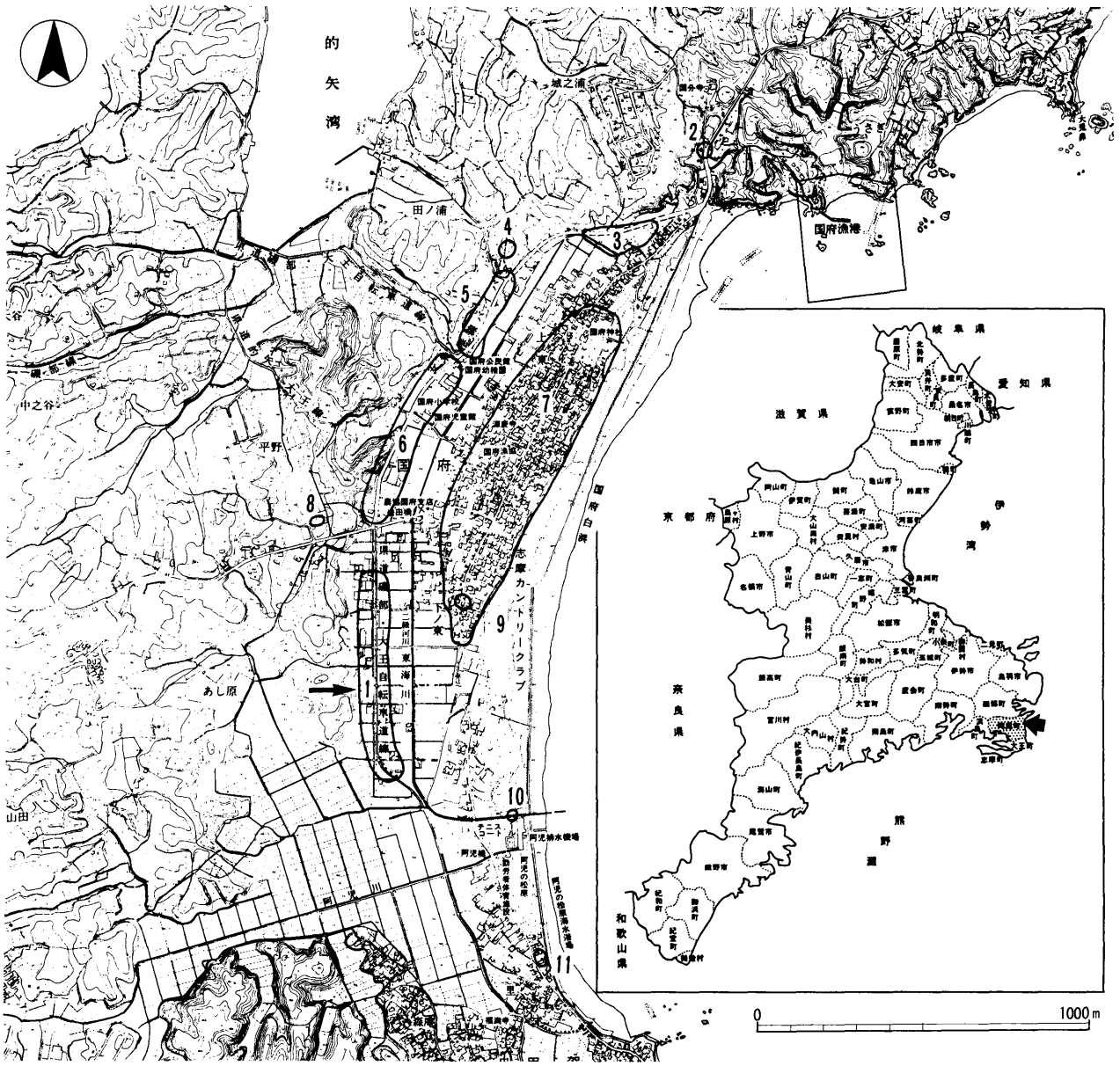
調査期間中は、例年になく秋の長雨が続き、再々にわたり、作業中断さぜるをえない状況に追い込まれた。調査区は、おおむね海抜１～２ｍにあり、また長雨による地下水位の上昇もあって、検出された遺構が１週間近く水没したままということも度々であった。また、土壌が砂質であるため、水が引いて行く際、溶けるように崩れ去っていき、無残な姿となっていった。

そのような困難な状況の中で何とか調査を終了することができたのは、地元の皆様のご努力の賜物であった。ここに、作業にあたっていただいた方々のお名前を記して感謝の意を表したい。

池田忠昭、市場美和子、上野すみ子、内田美紀子、大佐静夫、大田須美子、大伴芳子、香川茂、竹本正子、永富豊子、鍋島ふさ、濱野キヨ、東邦子、東山多治助、前田秋男、松田章、宮本勝子、宮本直代、山本更生、米永宏子（敬称略・五十音順）

### (2)　調査日誌（抄）

| | |
|---|---|
| ９月20日 | Ａ・Ｂ区　重機による表土除去（台風接近のため表面の雑草除去程度）。 |
| 24日 | Ｂ区重機による表土除去・地区坑設定。 |
| 26日 | 作業開始。 |
| 27日 | ＳＫ１及び４～６、ＳＤ２、３検出。ＳＫ５及びＳＤ２は現代の攪乱か？ |
| 10月 2日 | ＳＤ11から土師器片（鍋）多数出土。 |
| 7日 | ＳＤ14から土師器多数。礫も10数個確認される。 |
| 15日 | 大雨のため調査区西壁の一部崩壊。 |
| 17日 | Ａ区の重機による表土除去・地区杭設定。天目茶椀片など遺物わずか。 |
| 18日 | Ａ区検出作業開始。 |
| 21日 | ＳＤ29で胴木・杭出土。 |
| 22日 | Ｃ区重機による表土除去・地区杭設定。中央付近で比較的大きな陶器片など多数出土。 |
| 30日 | Ｃ区作業開始。 |
| 31日 | ＳＤ29で胴木・杭取り上げ。 |
| 11月 5日 | ＳＤ37から杭、胴木出土。 |
| 7日 | Ｃ区b12グリッドより獣骨らしきものが出土する。 |
| 15日 | Ｃ区の作業ほぼ終了。 |
| 18日 | Ｄ区重機による表土除去・地区杭設定。Ａ区同様遺物はほとんど無い。 |
| 20日 | Ｄ区作業開始。 |
| 21日 | 作業完了。午後から道具片付け等。 |




**第１図　遺跡位置図**（1:20,000）（阿児町『阿児町全図』1:10,000より）

1．東海道遺跡　2．御茶子遺跡　3．西殿遺跡　4．国府城跡　5．天神遺跡　6．殿畑遺跡　7．国府遺跡
8．地蔵堂経塚　9．東海道中世墓跡　10．和鏡出土地点　11．甲賀遺跡
＊遺跡は国府地区周辺の中世を中心とした時期のものに限る。

30日　現地説明会実施。（約40人参加）

12月 4日　引き渡し。

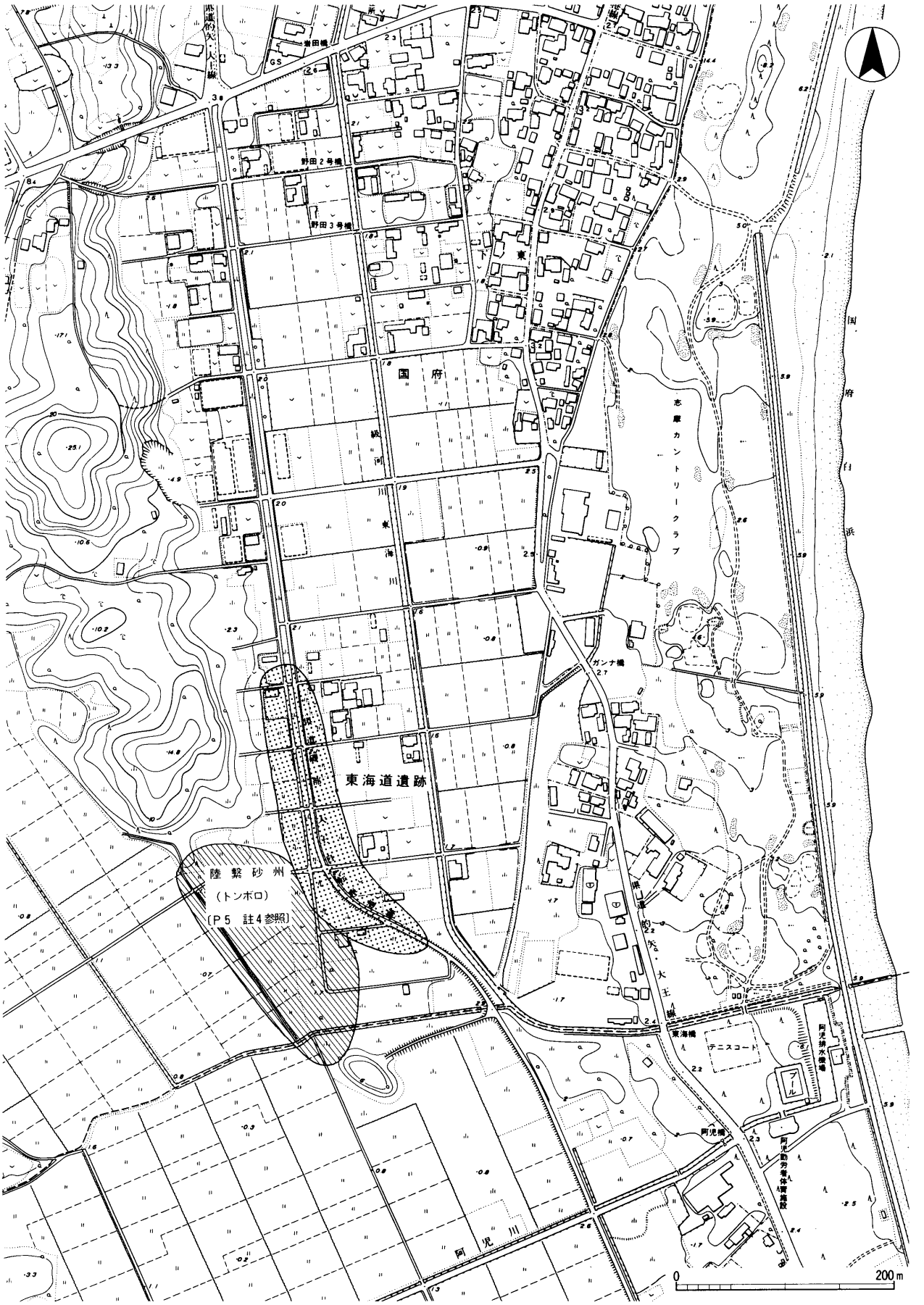
### (3) 文化財保護法等にかかる諸通知

- 文化財保護法第57条の３第１項（文化庁長官あて）平成８年９月３日付け道建第1134号（県知事通知）
- 文化財保護法第98条の２第１項（文化庁長官あて）平成８年８月16日付け教文第1804号（県教育通知）
- 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鳥羽警察署長あて）平成８年12月25日付け教文第18－75号（県教育通知）

〔註〕

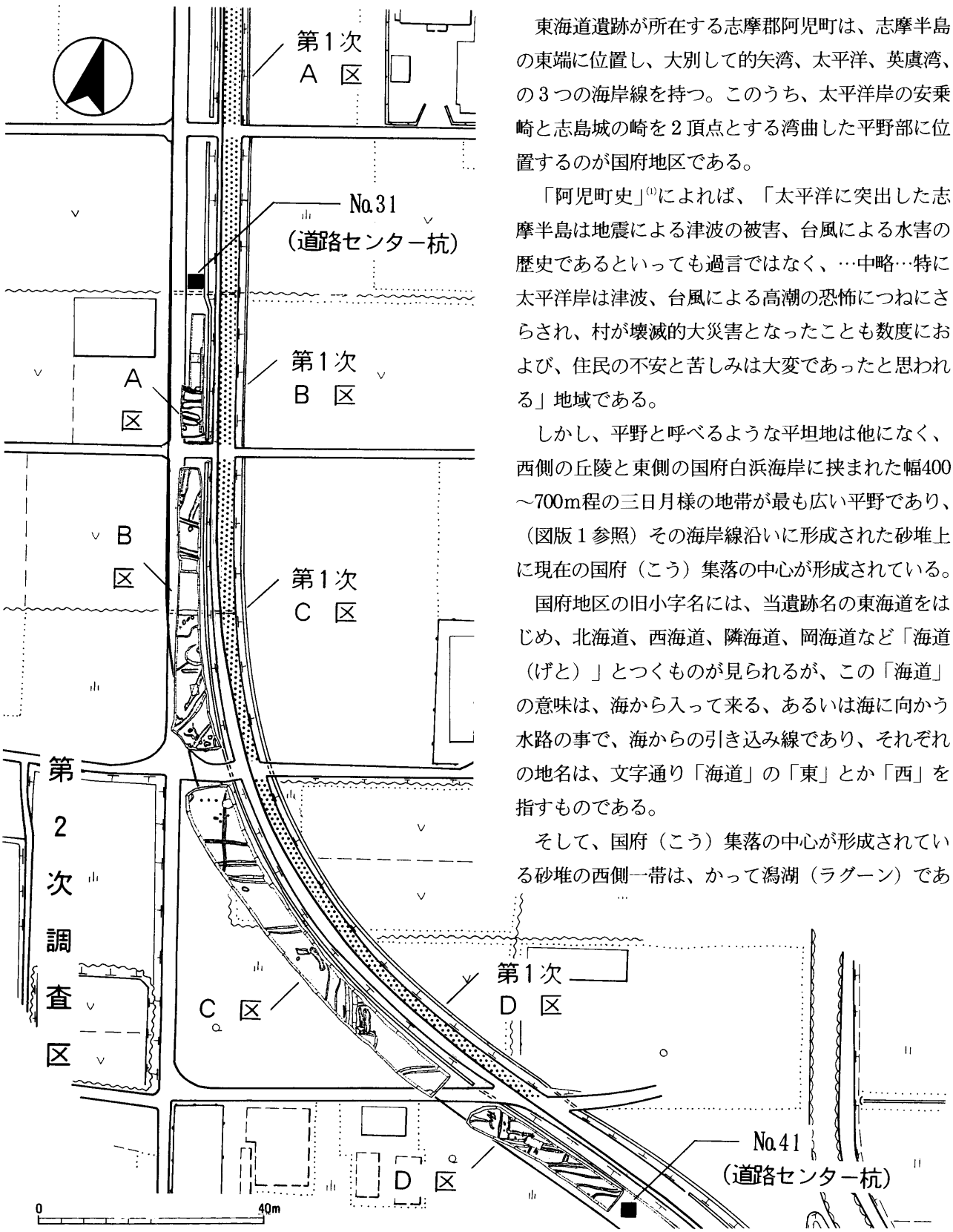
(1) 現在、「字東海道」・「字一色」は行政的に存在しない。

小字の統廃合により、「字東海道」は「字下ノ東」に、「字一色」は「字阿し原」となっている。（1988年２月26日官報告示）




第2図　遺跡周辺位置図（1：5,000）

# II　位置と環境




第3図　調査区位置図（1：1,000）

東海道遺跡が所在する志摩郡阿児町は、志摩半島の東端に位置し、大別して的矢湾、太平洋、英虞湾、の3つの海岸線を持つ。このうち、太平洋岸の安乗崎と志島城の崎を2頂点とする湾曲した平野部に位置するのが国府地区である。

「阿児町史」[1]によれば、「太平洋に突出した志摩半島は地震による津波の被害、台風による水害の歴史であるといっても過言ではなく、…中略…特に太平洋岸は津波、台風による高潮の恐怖につねにさらされ、村が壊滅的大災害となったことも数度におよび、住民の不安と苦しみは大変であったと思われる」地域である。

しかし、平野と呼べるような平坦地は他になく、西側の丘陵と東側の国府白浜海岸に挟まれた幅400～700m程の三日月様の地帯が最も広い平野であり、（図版1参照）その海岸線沿いに形成された砂堆上に現在の国府（こう）集落の中心が形成されている。

国府地区の旧小字名には、当遺跡名の東海道をはじめ、北海道、西海道、隣海道、岡海道など「海道（げと）」とつくものが見られるが、この「海道」の意味は、海から入って来る、あるいは海に向かう水路の事で、海からの引き込み線であり、それぞれの地名は、文字通り「海道」の「東」とか「西」を指すものである。

そして、国府（こう）集落の中心が形成されている砂堆の西側一帯は、かって潟湖（ラグーン）であ

ったものが、海岸砂丘形成の過程で次第に小さくなっていった後背湿地と考えられる[2]。つまり、潟湖（ラグーン）こそがまさに「海道」そのものであり[3]、当東海道遺跡は地理的には後背湿地上に存在すると見られる。ただ、現在の地形図から考えると、遺跡南西部については、後背湿地成立よりも早い時期に成立した陸繋砂州（トンボロ）上にかかるという見方もある[4]。

この地域では、当遺跡の他に、殿畑遺跡（第１図６）・天神遺跡（同５）・西殿遺跡（同３）の発掘調査が実施されており、徐々に周辺の歴史的環境が解明されてきている[5]。

その概要を見ると、殿畑遺跡では掘立柱建物、土坑、溝など居住地としての性格を持つ遺構が検出されており、天神遺跡でも同様である。また西殿遺跡では同様の遺構の他、26体の人骨が確認されている。時代的には、いずれも中世（鎌倉～室町時代）をその中心としている（西殿遺跡は古墳時代の土坑も見られる）。なお、殿畑遺跡・天神遺跡は海抜2.5m程度（天神遺跡の方が若干低い）、西殿遺跡は海抜1.5m程度にある。

また、これらの遺跡のやや南方には東海道中世墓（第１図９）がある。

これに対し、当遺跡の現況は、海抜１～２m程度の低地で、付近一帯は田畑地となっており、耕作土は海岸に多く見られる砂質土で、貝殻が多く散布している。また第１次調査の結果では、圧倒的に溝が多く、建物跡は検出されていない。そして礫群・杭列の存在から水利施設が、また小溝・隆起遺構も見られることなどから、一種の食糧生産の場ではなかったかと考えられている[6]。

「国府」集落一帯は、字が示すように志摩国の政庁の所在を意味するものと考えられるが、現在のところ国府跡と推定される遺跡は見つかっておらず、唯一の関連施設で現存している国分寺も奈良時代の国分寺と同一と断定されるには至っていない[7]。このような遺跡の立地と内容をもとに、国府地区の平野部はかなり制約された地理的条件の中で、居住域・耕作域・墓域が有機的な関連をもって配置されていたと分析されている[8]。

〔註〕

(1) 『阿児町史』　阿児町　1977年
(2) 伊藤裕偉『東海道遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1989年
(3) 前掲書(2)
(4) 津東高校教諭前川明男氏の御教示による。
(5) ア、新田洋『殿畑遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1980年
　イ、中村信裕『天神遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1984年
　ウ、齋藤直樹『西殿遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1992年
(6) 前掲書(2)
(7) 榎村寛之他『斎宮・国府・国分寺』特別展図録　斎宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター　1996年
(8) 前掲書(2)

# Ⅲ　調査の成果－層位と遺構－

## １　調査の方法

調査区は、全長200mほどであるが、その間に車道・畦道が何本か走っていて、農作業等で随時車が出入りしており、遮断する事ができない。そのため、残さなければならない道路を境目として、北から順にA～Dの４区を設定した。各区ごとに任意の基準点を設け、４m方眼を切り小地区を設定した。各小地区名は、北西隅を原点とし、北から南へは算用数字、西から東へはアルファベット小文字で示した。

今回の調査の際、最新の国土調査による水準点をもとに計測した結果、A・B区の標高は1.9m前後、C・D区は1.6m前後であった。これは第１次調査での標高より１m以上高い値である。残念ながら、第１次調査時点での基準点が現存していないので確認することができなかったが、第１次調査の基準レベルが実際より低い可能性があり、第１次調査報告と第２次調査報告（本書）の数値の正確な整合を図ることができなかった。

なお、雑草が生い茂るA・B・D区および高さ３m近い竹が密生しているC区とも、表土をバックホウにより数十cm掘削した上で、あとはすべて人力に

よる掘削を行った。

## 2　基本層序と遺構概要

今回調査を行った地区は、基本的には砂もしくはシルトで構成された土層が認められる。

各区の層序は土層断面図（第４・５図）の通りである。各区によって若干の差異はあるものの、基本的には第Ⅰ層＝表土、第Ⅱ層＝褐色砂質シルト（包含層）、第Ⅲ層＝暗褐色砂質シルト、第Ⅳ層＝黄褐色砂質シルトである。多くの遺構は、第Ⅲ層上面で検出された。

層序はＢ・Ｃ区では比較的安定しているが、Ａ・Ｄ区では不安定で、海岸部に見られるような白色砂の広がりが見られる。Ｄ区は他地区より標高が低く、地下水位が高いため、表土直下あたりから全体に湿気を帯びたていた。この地がラグーンであったことは前述したが、Ｄ区は、ラグーンの一番下手でもあり、陸地化したのが他地区より遅れたものと考えられる。

遺構の大半は溝であるが、全体的な傾向としてほぼ東西方向の溝とそれに直行するような南北方向の溝が入り交じっている。ただし、時期不明の溝も多く、溝の方向性と性格（役割）の関連は残念ながら把握できていない。また、第１次調査との関連を考えての調査を行ったが、一部を除き、各遺構を対応させることは出来なかった。検出面があまり安定していなかったことも原因の一つとなろう。

以下、各区の主な遺構について述べる。

## 3　Ａ区の遺構

**ＳＤ29**　東西方向の幅５ｍほどの溝で、ほぼ平坦な底部を持つ。この底部にあたる南側法面下部で胴木と杭が見られた。全長約4.6m、根元側（東側）の直径約10㎝の胴木は、比較的まっすぐな木を利用したものと思われるが、枝を払った以外には加工跡は認められない。杭は３本で、いずれも先端を鋭く加工してあり、胴木を支えるように打ち込まれている。護岸用であろう。北側法面では確認されなかった。埋土は礫・貝混灰褐色粘質シルト層で、15～16世紀の土師器が出土している。

**ＳＤ25・26・27・28**　いずれも幅１～1.5m、深さ0.2m程度で、ＳＤ29同様東西方向の溝である。埋土は白色砂で、遺物もほとんど無く、時期及び性格は不明である。第１次調査Ｂ地区中央部で検出された土坑群と類似している。

## 4　Ｂ区の遺構

**ＳＤ７**　幅1.5m、深さ0.3mの溝で、北東から南西方向に流れる。上層部からは比較的多量の貝殻とともに近現代の陶器が、また下層からは15～16世紀頃の土師器が多数出土している。

**ＳＤ11**　幅0.5m、深さ0.1m程で、東西方向の細長い溝である。15～16世紀頃の土師器が出土している。

**ＳＤ13**　幅1.2m、深さ0.2m～0.3mの東西方向の溝だが、性格・時期等を決定する遺物はない。

**ＳＤ14**　幅2.8m、深さ0.2mで、ＳＤ13に隣接しており、15～16世紀の土師器等が比較的多数出土している。また溝の底部北側法面付近で大人のこぶし大の礫が10数個かたまっていたが、護岸用の石が崩れたものであろうか。位置や礫群の出土から、第１次調査Ｃ区のＳＤ９の続きと考えられる。

**ＳＤ18**　幅１ｍ、深さ0.2mで東西方向である。検出面付近で近世のものかと思われるキセルが出土したのみで、他に時期を決定するような遺物はない。

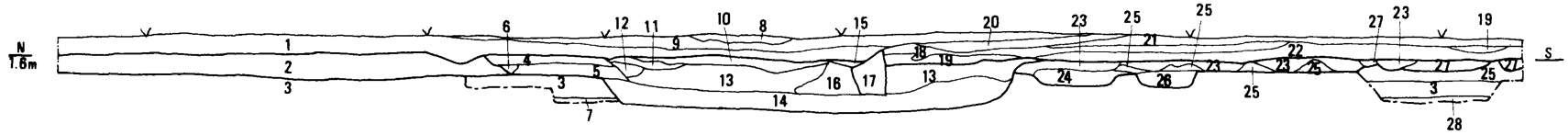
**ＳＤ20**　幅0.9m、深さ0.2m程度で南北方向であるが、ＳＤ18に直交する形で流入している。ＳＤ18同様遺物はほとんどない。位置や方向から第１次調査Ｂ区・Ｃ区のＳＤ１の続きと考えられる。

**ＳＤ21**　幅1.2m、深さ0.2m程度で南北方向である。埋土は白色砂で、遺物はほとんどない。

**ＳＤ23**　幅１ｍ、深さ0.2m程の溝で、ＳＤ７に隣接し、北東から南西方向に流れる。土師器・陶器等の小片が若干出土するが、時期を決定するには至らない。

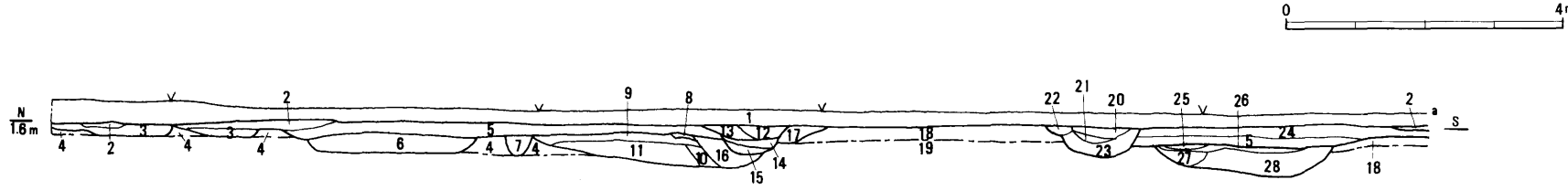
**ＳＫ８**　ＳＤ７の北側肩を切る形で広がり、調査区外にかかるので、全形は確認できない。土師器や陶器などの小片が出土しており、時期的にはＳＤ７と大差ないものと考えられる。

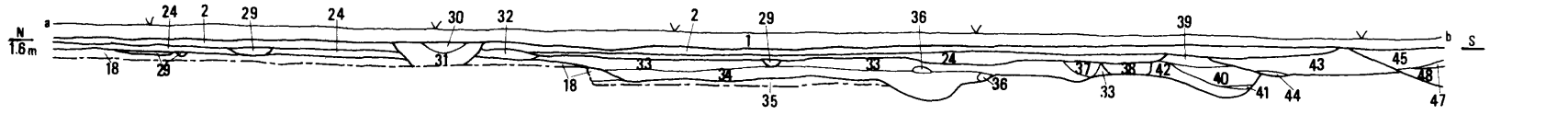
**ＳＫ10**　北西の半分程がＳＺ12に切り込む形で広がる。南肩は、ＳＺ12と同様深さ0.１m弱と浅い。15～16世紀頃の土師器や陶器片が少量出土しているが、ＳＺ12に関連するものとも考えられ、ＳＫ10そのものの性格を決定するには至らない。

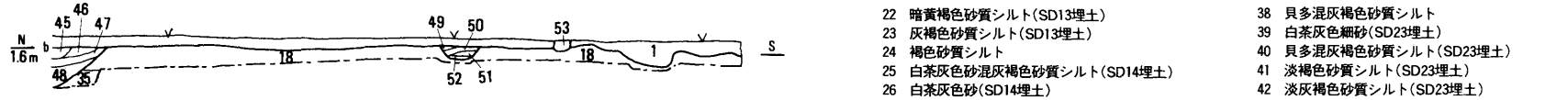



A区　東壁

1　表土(小礫混灰褐色砂質土)
2　淡褐色砂質シルト
3　灰褐色砂質シルト
4　褐色砂質シルト(SD29埋土)
5　灰褐色砂質シルト(SD29埋土)
6　5＋白茶灰色砂(SD29埋土)
7　暗灰褐色砂質シルト
8　表土(淡黄褐色砂質土)
9　表土(褐色砂質土)
10　灰褐色砂質シルト(SD29埋土)
11　淡黄褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト
　・灰褐色砂質シルト斑状(DS29埋土)
12　11で灰褐色砂質シルトがやや多い(SD29埋土)
13　淡黄褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト斑状(SD29埋土)
14　灰褐色粘土質シルト(礫・貝混)(SD29埋土)
15　炭層
16　12＋13
17　撹乱(試掘坑)
18　小礫混褐色砂質土
19　小礫混灰色砂質土
20　黄褐色細砂
21　表土(灰色砂質土)
22　小礫混暗褐色砂質土
23　暗褐色砂質シルト
24　白茶灰細砂(SD28埋土)
25　褐色砂質シルト(4よりやや淡)
26　白茶灰細砂(SD27埋土)
27　暗褐色砂質土混白茶灰砂
28　暗灰褐色砂質シルト



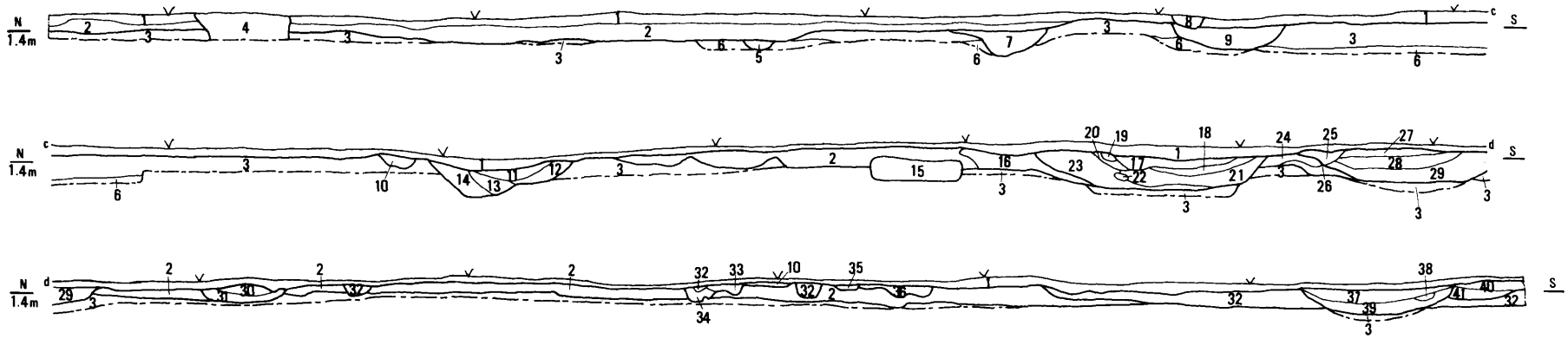




B区　東壁

1　表土(小礫混灰褐色砂質土)
2　灰褐色砂質シルト
3　白茶灰色細砂混灰褐色砂質シルト
4　褐色砂質シルト(＝A区25)
5　灰褐色砂質シルト(2よりやや淡)
6　白茶灰色細砂(SD20埋土)
7　小礫混灰褐色土
8　淡褐色砂質シルト
9　褐色砂質シルト
10　淡灰褐色砂質シルト
11　白茶灰色細砂
12　黄褐色細砂(SD19埋土)
13　小礫混灰褐色砂質シルト(SD19埋土)
14　淡灰褐色砂質シルト(DS19埋土)
15　灰褐色砂質シルト(SD19埋土)
16　白茶灰色細砂
17　淡褐色砂質シルト(SD19埋土)
18　暗褐色砂質シルト(第Ⅲ層)
19　暗灰褐色砂質シルト
20　小礫混灰褐色砂質シルト(SD13埋土)
21　〃　(20よりやや暗)(SD13埋土)
22　暗黄褐色砂質シルト(SD13埋土)
23　灰褐色砂質シルト(SD13埋土)
24　褐色砂質シルト
25　白茶灰色砂混灰褐色砂質シルト(SD14埋土)
26　白茶灰色砂(SD14埋土)
27　26＋貝少混淡灰褐色砂質シルト(SD14埋設)
28　貝少混淡灰褐色砂質シルト(SD14埋土)
29　撹乱(橙色粘質土混)
30　現代排水暗渠(灰褐色土)
31　〃　(橙色粘質土)
32　淡橙色粘質土混褐色砂質シルト
33　灰褐色砂質シルト(SZ12埋土)
34　淡灰褐色砂質シルト・鉄分含褐色土斑状(SZ12埋土)
35　黄褐色砂質シルト(第Ⅳ層)
36　白茶灰色砂
37　淡灰褐色砂質シルト
38　貝多混灰褐色砂質シルト
39　白茶灰色細砂(SD23埋土)
40　貝多混灰褐色砂質シルト(SD23埋土)
41　淡褐色砂質シルト(SD23埋土)
42　淡灰褐色砂質シルト(SD23埋土)
43　貝少混褐色砂質シルト
44　43＋白茶灰色細砂
45　灰褐色砂質シルト・小礫混褐色砂質シルト斑状(SD7 埋土)
46　淡灰褐色砂質シルト(SD7 埋土)
47　45で小礫混褐色砂質シルト少ない(SD7 埋土)
48　小礫混褐色砂質シルト(SD7 埋土)
49　黒褐色砂質シルト(SD2 埋土)
50　灰褐色砂質シルト(SD2 埋土)
51　〃　(50よりやや白い)(SD2 埋土)
52　黄灰褐色砂(SD2 埋土)
53　撹乱

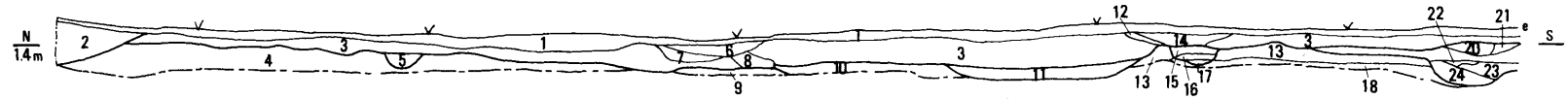
第4図　調査区土層断面図(1)(1：100)

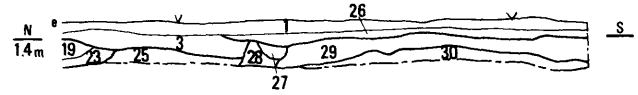
第5図　調査区土層断面図(2)（1：100）

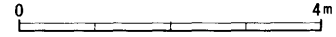



C区　東壁

1　表土(小礫混灰褐色砂質土)
2　褐色砂質シルト
3　暗褐色砂質シルト(第Ⅲ層)
4　現代撹乱
5　白茶灰色砂質シルト(SD33埋土)
6　黄褐色砂質シルト（第Ⅳ層)
7　貝混灰褐色砂質シルト(SD34埋土)
8　現代撹乱
9　貝混灰褐色砂質シルト(SD35埋土)
10　近現代撹乱
11　ビニル混灰褐色砂質シルト(SD37上層埋土)
12　橙色礫(SD37上層埋土)
13　褐色礫混灰褐色砂質シルト(SD37下層埋土)
14　灰褐色砂質シルト(SD37下層埋土)
15　貝多混灰褐色砂質シルト(SK39埋土)
16　暗灰褐色砂質シルト
17　暗褐色砂質シルト(SD41埋土)
18　白色砂・灰褐色砂質シルト・橙色砂・炭斑状(SD41埋土)
19　白茶灰色砂質シルト(SD41埋土)
20　灰褐色砂質シルト(SD41埋土)
21　白色砂・灰褐色砂質シルト斑状(SD41埋土)
22　貝層
23　貝少混灰褐色砂質シルト(SD41埋土)
24　白色砂・灰褐色砂質シルト斑状
25　白色砂・褐色砂質シルト斑状(SD44埋土)
26　白色砂・暗褐色砂質シルト斑状
27　灰褐色砂質シルト(SD44埋土)
28　24十炭(SD44埋土)
29　礫貝混灰褐色砂質シルト(SD44埋土)
30　淡褐色砂質シルト(SD52埋土)
31　白茶灰色砂(SD52埋土)
32　淡褐色砂質シルト
33　淡褐色砂質シルト・褐色砂質シルト斑状
34　褐色砂質シルト・白色砂斑状
35　褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト斑状
36　灰褐色砂質シルト
37　淡褐色砂質シルト(SD45埋土)
38　灰白色砂(SD45埋土)
39　灰褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト斑状(SD45埋土)
40　褐色砂質シルト・灰褐色砂質シルト斑状
41　白茶灰色砂質シルト




D区　東壁

1　表土(小礫混灰褐色砂質土)
2　現代排水溝(橙色粘質土)
3　褐色砂質シルト
4　淡褐色砂質シルト(≒C区　32)
5　白色砂
6　褐色砂質シルト・灰褐色砂質シルト斑状
7　白茶灰色砂質シルト
8　茶褐色砂質シルト
9　暗褐色砂質シルト
10　鉄分含淡褐色砂質シルト
11　鉄分含淡黄褐色砂質シルト(SD56埋土)
12　暗褐色砂質シルト・褐色砂質シルト斑状
13　灰褐色砂質シルト
14　明褐色砂質シルト
15　白色砂質シルト(SD58埋土)
16　灰白色砂質シルト(SD58埋土)
17　白色砂(SD58埋土)
18　淡黄褐色砂質シルト
19　鉄分含灰褐色砂質シルト(SD57埋土)
20　明褐色砂質シルト(SD57埋土)
21　灰褐色砂質シルト(SD57埋土)
22　灰褐色砂質シルト・白色砂斑状(SD57埋土)
23　鉄分含茶褐色砂質シルト(SD57埋土)
24　白色砂(SD57埋土)
25　鉄分含茶褐色砂質シルト
26　明褐色砂質シルト
27　撹乱
28　暗褐色砂質シルト・淡褐色砂質シルト斑状(SD55埋土)
29　暗褐色砂質シルト・灰褐色砂質シルト斑状
30　鉄分含淡黄褐色砂質シルト

ＳＺ12　北側で深さ0.2m、南側で深さ0.１m弱程度の落ち込みである。15～16世紀頃の土師器鍋片や近世の陶器片が比較的多数出土している。第１次調査Ｃ区のＳＤ10の続きである可能性がある。

ＳＤ２　ＳＤ２及びそれ以南の溝・土坑については、表土直下付近から切り込まれ、遺物もほとんどない。また調査区南壁にかけてビニール等が混入した貝殻が散乱しており、近～現代の攪乱と考えられる。

## 5　Ｃ区の遺構

ＳＤ32　最大幅0.6m、深さ0.2m弱で南北方向の細長い溝であるが、ゴミ等の混入状況から現代のものと考えられる。

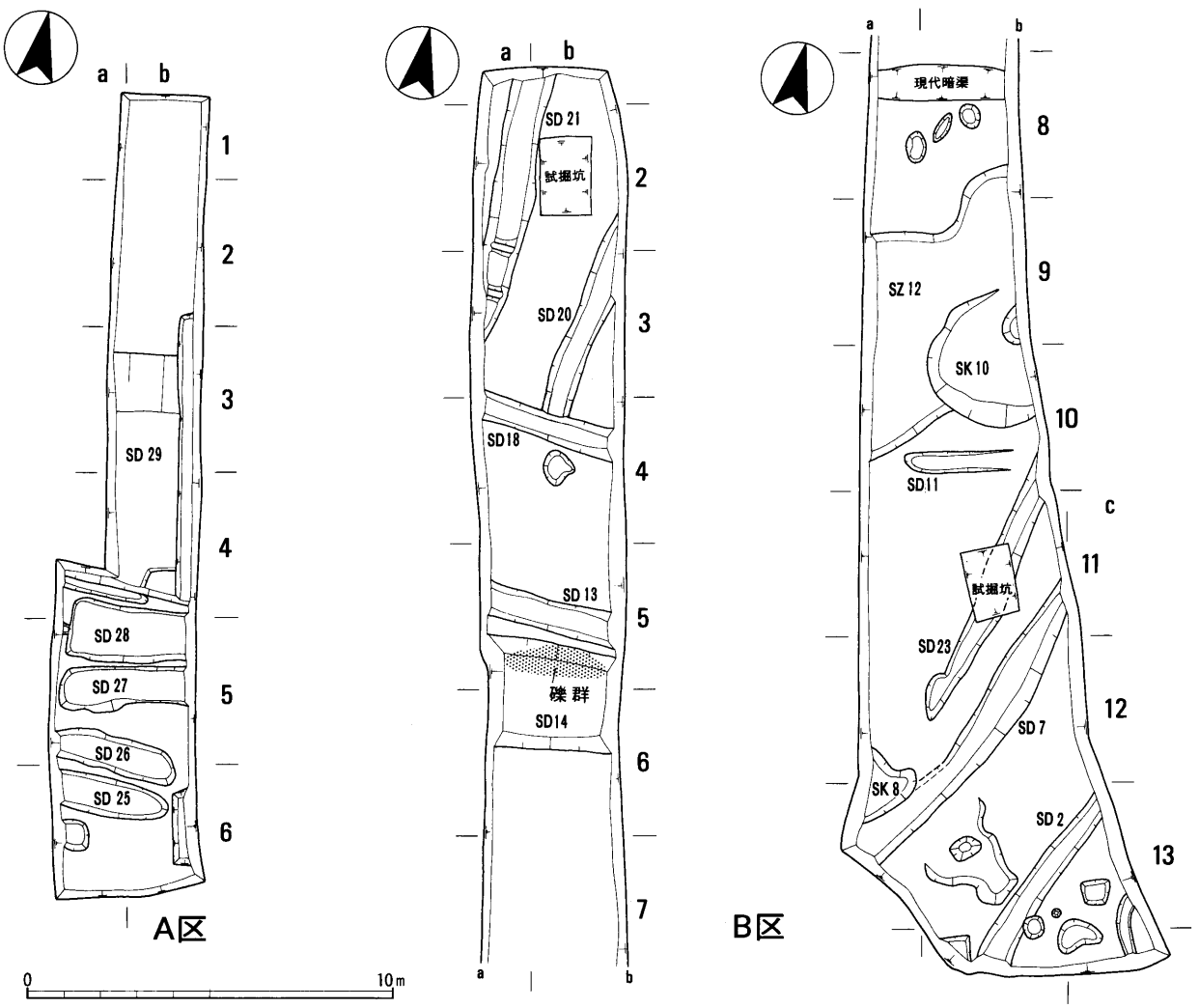
ＳＤ33　ＳＤ32をほぼ直交しながら横切る同程度の溝で、現代のものと考えられる。

ＳＤ34　幅１m、深さ0.2m程度の溝で、ＳＤ32に直交する形で切られている。大人のこぶし大の礫多数に交じって15～16世紀頃の土師器や陶器が比較的多数出土している事から同時期のものと考えられる。礫は廃棄されたようにも見えるが、性格不明である。

ＳＤ35　幅1.3m、深さ0.4mほどのしっかりした溝で、東から西に流れる。上層付近からは、礫や近世陶器片などが、また下層付近からは他の溝よりも若干古い14～15世紀の土師器等が多量に出土した。

なお、ＳＤ34出土の陶器片がＳＤ35出土の陶器片と接合したことから、併存した溝と考えられる。

ＳＤ37　ＳＤ35とほぼ同規模、同方向に走る溝である。上層部から礫に交じって近現代の陶器や廃棄物等が多量に出土した。さらに下層においては、15～16世紀頃の土師器や陶器が多量に出土した。また北側法面下部に胴木・杭がみられた。全長約2.4mの胴木の両端は、のこぎりで切ったと思われる加工



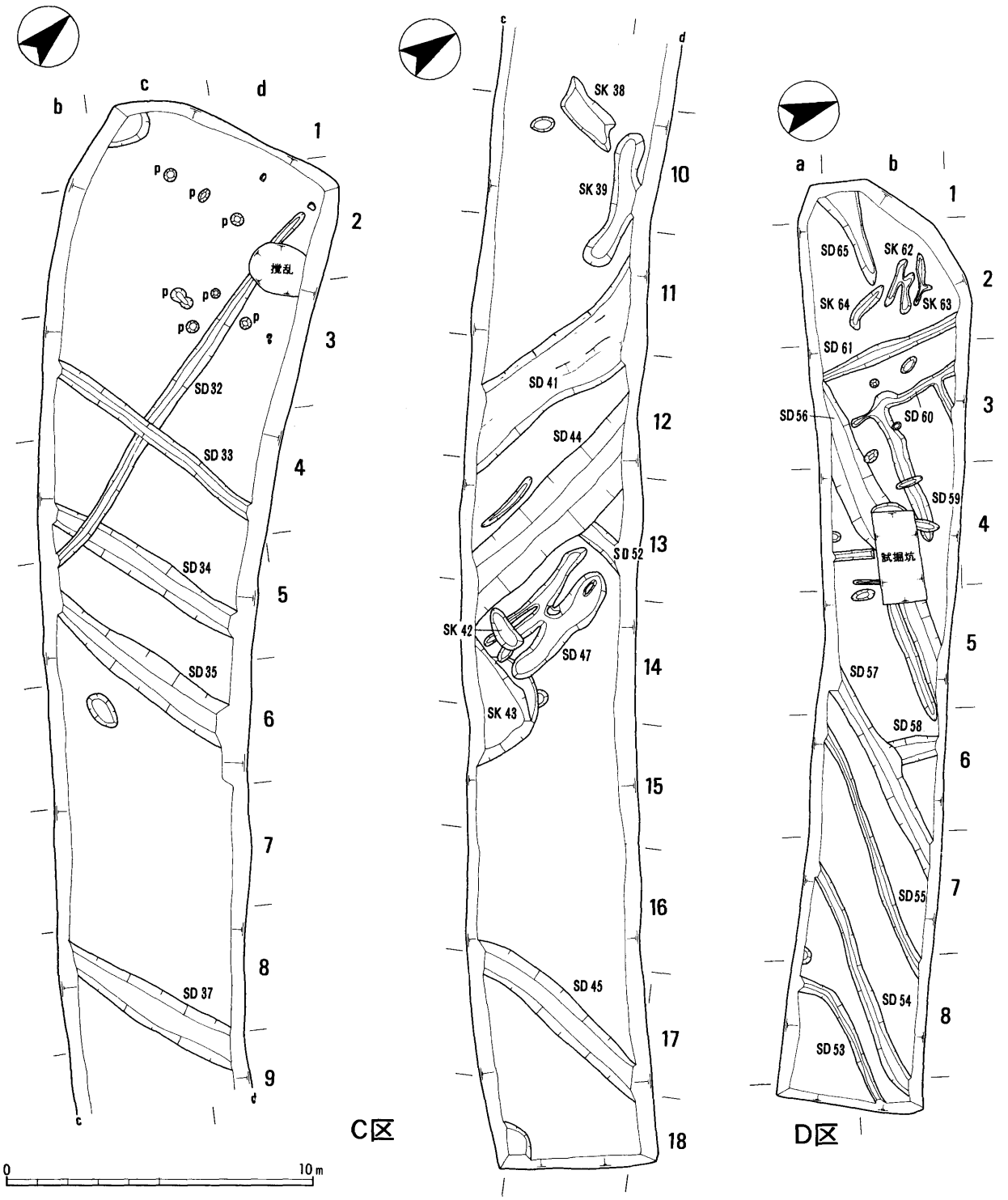

第６図　調査区平面図（Ａ区・Ｂ区）（１：200）

跡がみられた。埋土は灰褐色砂質シルトで、遺物等から考えて、A区ＳＤ29の胴木と同じく15～16世紀頃のものと思われる。

なお、溝中央部にも５本の杭(第10図Ｗ８～12)が見られるが、胴木の杭よりは20cm浅い打ち込みであり、上層の遺物に関連する時期のものとも考えられる。

ＳＤ41　最大幅2.3m、深さ0.3m程で、比較的平坦な底部を持ち、北から南に流れる。検出面付近で獣骨とみられる骨片が10点ほど出土しているが、他に時期を決定するような遺物はあまりない。

ＳＤ44　ＳＤ41に並行して走る最大幅2.3m、深さ0.4m弱の溝である。15～16世紀頃の土師器が比




第７図　調査区平面図（Ｃ区・Ｄ区）（１：200）

較的多数出土している。また北側で護岸用に並べた石が崩れたかと思われる、大人のこぶし大の礫が10数個見られた。

ＳＤ45　幅1.1m、深さ0.2m程であるが白色砂を埋土とする遺構で遺物もほとんどなく、時期を決定するに至らない。

ＳＤ47　土坑とも考えられる、深さ0.2mほどの白色砂を埋土とする遺構である。遺物もほとんどなく、自然の水溜まりとも考えられる。

ＳＫ38　深さ0.2m弱で少量の貝殻を含む白色砂を埋土とする。時期を決定するような遺物はない。

ＳＫ39　東部が調査区外にかかり全形は確認できないが、深さ0.4m程で、サザエや蛤など大量の貝殻と共に15～16世紀頃の土師器が出土した。いわゆる「貝塚」的なゴミ捨て場とも考えられる。

ＳＫ42　ＳＤ47を切る長さ1.4m、幅0.7m、深さ約0.2mの土坑で近世の土器が若干出土している。

ＳＫ43　西部が調査区外にかかり全形は確認できないが、深さ0.3m程で、15～16世紀頃の土師器が比較的多数出土した。また表土直下付近からＳＤ41と同様の獣骨と思われる骨片を数点確認した。

ピット　調査区北端付近に直径0.4m程度のピットを数カ所検出した。深さは0.1m程度である。建物としてはまとまらなかった。

## 6　Ｄ区の遺構

ＳＤ53・54・55　いずれも東西方向で幅0.4m、深さ0.1m程度であるが、遺物は皆無に近く、性格及び時期を決定できない。

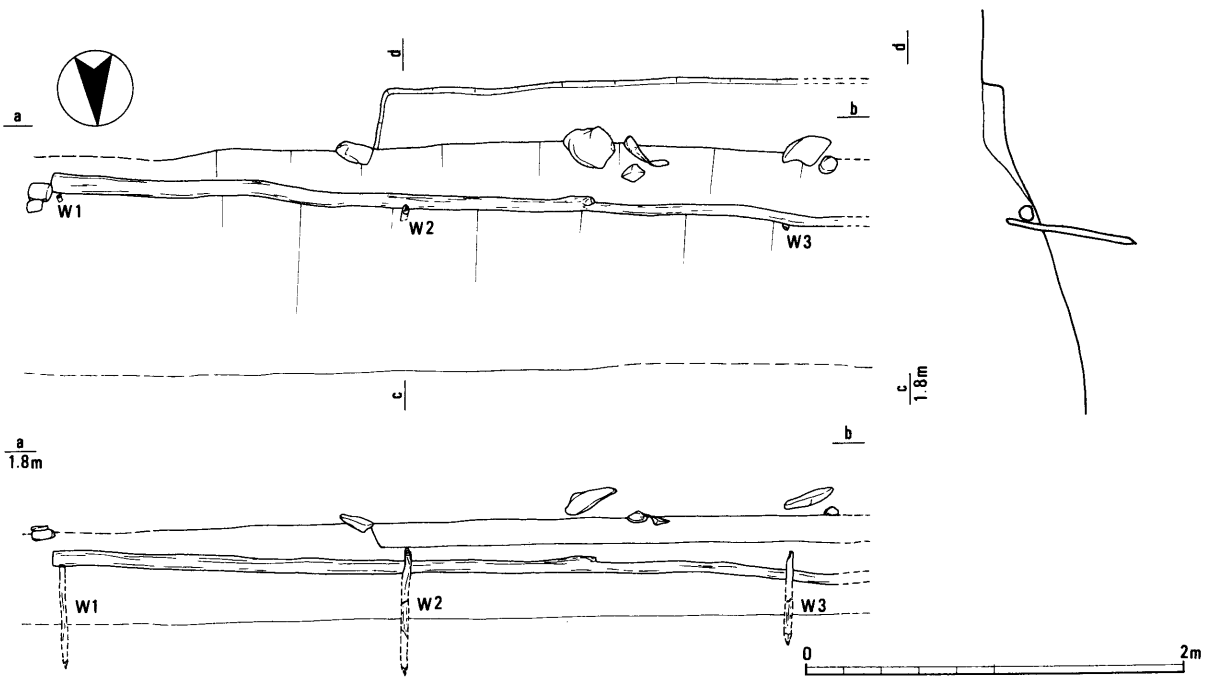
ＳＤ56　幅1.6m、深さ0.3m弱で、Ｄ区の遺構としては比較的しっかりと東から西に流れるが、やはり性格及び時期を決定するような遺物はない。

ＳＤ57・58　幅0.9m、深さ0.2m程で東西方向のＳＤ57に、幅0.9m、深さ0.2m弱で南北方向のＳＤ58が直交に近い形で合流しているようにみられるが、性格その他を語るような遺物はない。

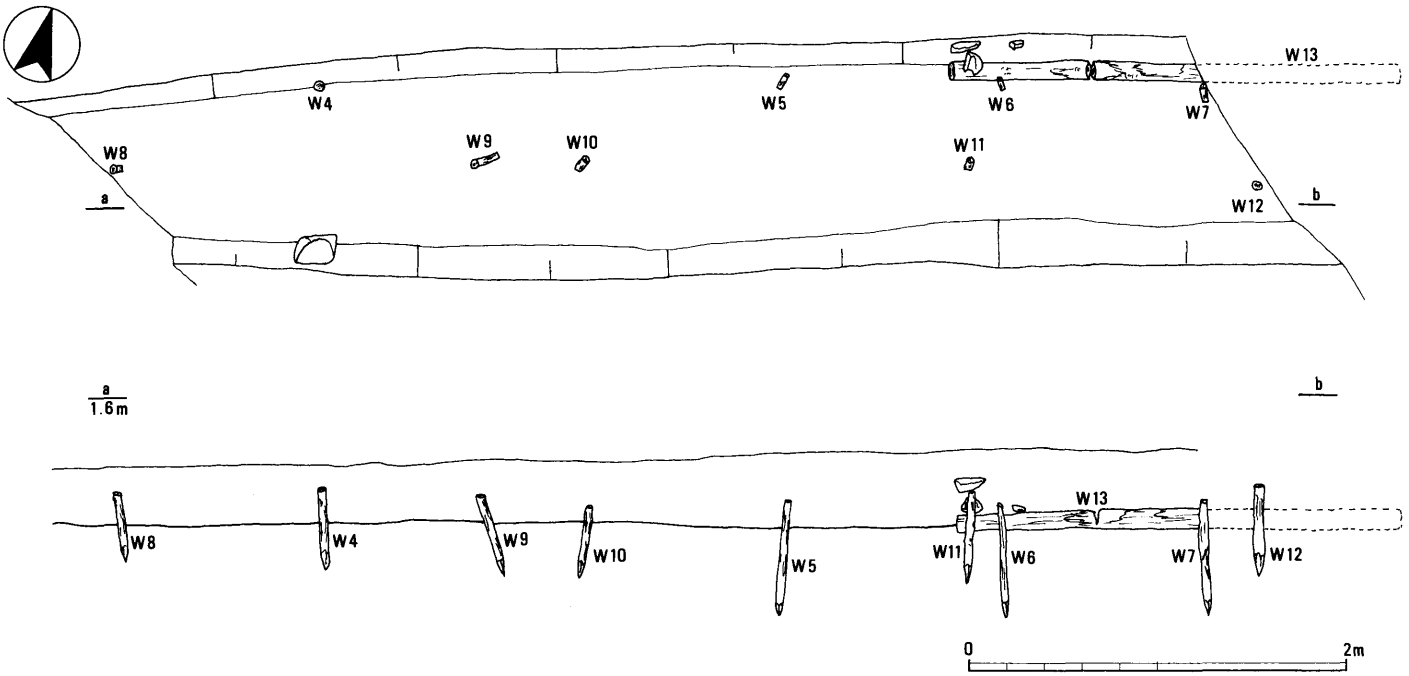
ＳＤ59・60　遺物がほとんどなく、性格・時期等不明である。

ＳＤ61・65・ＳＫ62・63・64　いずれも、深さ0.1m弱で遺物も皆無に近い。自然の溝や水溜まりであろうか。

Ｄ区は、検出面付近で少量の土器片や近現代（昭和の戦中ないし戦後間もない頃）と思われる化粧品のビンが見つかる程度であり、全体的に常時生活するには適さない、水気の多い時期が続いてきたものと思われる。




第８図　Ａ区　ＳＤ29胴木・杭出土状況図（１：40）




第９図　Ｃ区　ＳＤ37胴木・杭出土状況図（１：40）

# Ⅳ　調査の成果－出土遺物－

今回の調査により出土した遺物は、整理箱で20箱ほどであった。その内訳は、大部分が土器で、他には若干の金属製品、木製品、石製品が見られる程度である。また完全な形の物は、後述する土錘や輸入銭などごく少数で、一部の陶器片を除くと大半は小片であり、器種や時期決定の困難な物であった。また、遺構の大半が溝であることから、遺物には混入が考えられ、時期を確定しにくい傾向がある。以下主な遺物について遺構ごとに述べる。編年基準の出典については最後に一括して掲載する。なお、（　）内の数字は、第11・12図の遺物の番号と対応する。

## １．Ａ区の遺物

ＳＤ29（１）　Ⅲ章でのべたように、15～16世紀の土師器片と胴木及び杭が見られる。陶器椀（１）はケズリ出しの高台で灰釉がかかる。一筋のみ見られる文様は鉄絵と考えられる。近世美濃産小椀か。木製品は杭（第10図　Ｗ１～３）が出土している。

## ２．Ｂ区の遺物

ＳＤ7（２～７）　土師器鍋（４）は器壁がやや厚めで、口縁部は短く、端部が内側に折り返されている。12世紀半ば～後半と見られ、今回の調査において出土した最も古い時期の土師器である。土師器羽釜（５）は口縁部は内湾し、端部が外側に折り返されて面を持つ。陶器捏鉢（６）は常滑産で、口縁端部の平坦面がやや広く、器壁も体下部から口縁部に向けて厚くなっていく。16世紀半ばのものであろう。磁器椀（２）は染付による文様が見られる。陶器甕（３）は常滑産で、自證院遺跡編年のＢ類に相当する18世紀前半のものである。近世と思われる陶器大皿（７）は今回の調査で出土した陶器の中で唯一の九州産（唐津系）と見られる。

ＳＤ11（８～10）　土師器鍋（８～10）は口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。いずれも15世紀後半のものと思われる。

ＳＤ14（11～22）　土師器鍋（16）は口縁端部が上方に突出し、端部外側に面を有する。同（17）は

口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。同（18）は口縁端部が内側に折り返されているが、残存している端部外側はヨコナデが２回行われた結果、わずかであるが段差が生じて上下2面を有するように見える。また土師器羽釜（19）は口縁部にかけて内湾しているとみられる。これらの土師器はいずれも15世紀後半から16世紀中葉のものであろう。また、土師器小皿（15）は残存部で確認する限りは、器高0.8㎝、端部がわずかに内に反る程度の薄いものである。陶器椀（11）は古瀬戸後期15世紀半ば頃の平椀である。陶器皿（12）は瀬戸産の輪禿皿で17世紀後半から18世紀初頭にかけてのものである。磁器椀（13～14）はいずれも青磁である。土錘は、球形に近い紡錘形（20）と細長い紡錘形（21・22）があり、いずれも土師質である。

ＳＤ18（23）　青銅製のキセル（23）が検出面付近で見つかっているが、他に時期を決定する遺物がないので、近世ないし近代の遺構であろう。なお、（23）の内面には木質様の薄片が付着している。

ＳＤ23（24）　陶器椀（24）は瀬戸美濃産の天目茶椀で16世紀後半のものであろう。

ＳＫ8　若干の土師器片が出土しているが、ＳＤ７と大差ない時代のものと思われる。

ＳＫ10（25）　土師器鍋（25）は口縁端部が内側に折り返され、端部外側に面を有する。15世紀後半のものであろう。

ＳＺ12（26～27）　土師器皿（26）は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデされている。他に土師器鍋の小片も出土している。磁器椀（27）は青磁である。この他近世のものと思われる陶器片も若干出土している。

## 3　Ｃ・Ｄ区の遺物

ＳＤ34（28～32）　土師器鍋（28～29）はいずれも15世紀後半のもので、口縁端部が上方に突出し、端部外側に面を有する。土師器羽釜（30）は口縁部にかけて内湾していると見られ、16世紀代のものと思われる。陶器摺鉢（31）は内面底部まで摺目が見られる（４本／㎝）。常滑産で、やはり16世紀代のものと思われる。陶器壺（32）はＳＤ34から出土した１破片が、ＳＤ35から出土した２破片と接合されたもので、15世紀半の常滑産であろう。

ＳＤ35（33～41）　土師器鍋（33～34）は口縁端部が内側に折り返されるが、端部外側に面を有しない型である。前者が14世紀後半から15世紀頃、後者が15世紀前半に属すると思われる。土師器羽釜（35）は口縁部が残っていないため特徴を捉えにくいが、（30）と同様のものと思われる。土錘（36）は土師質の円筒形である。陶器椀（37）は尾張型の山茶椀で、13～14世紀頃のものであろう。陶器鉢（38）は常滑産の片口鉢と推定される15世紀後半のもの、同（39）は15世紀半ばのもので、摺目はないが瀬戸美濃産の摺鉢と推定される。陶器甕（40）は常滑産であるが底部のみで時期は特定しにくい。陶器壺（41）は古瀬戸後期で15世紀後半のものと思われる。

ＳＤ37　上層から近世の陶器片が、また下層からは15～16世紀の土師器片が出土している。木製品としては、胴木（第10図　W13）、杭（同　Ｗ４～12）が出土している。

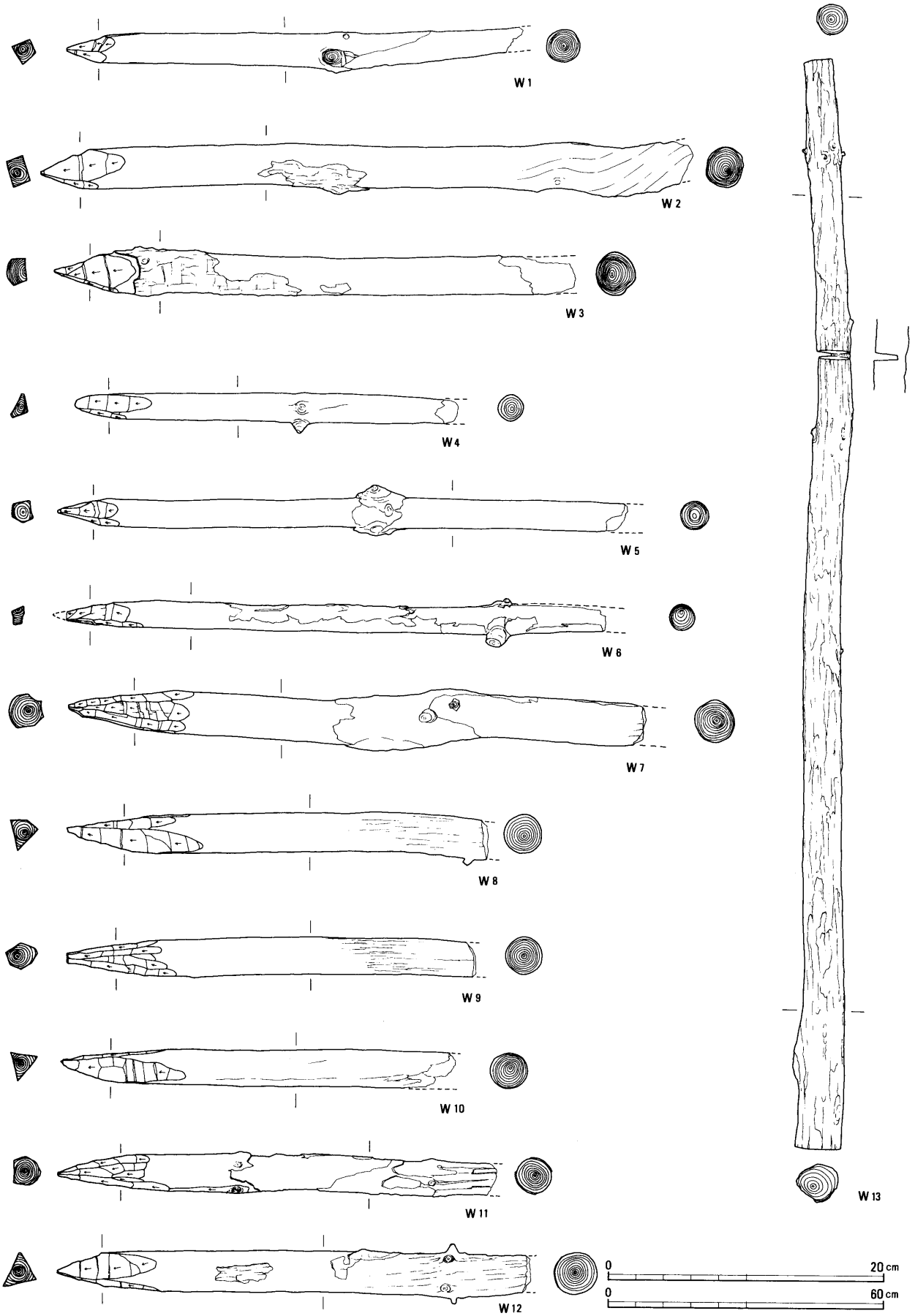
ＳＤ44（42～46）　陶器椀（42）は（37）と同様の山茶椀と思われる。陶器甕（43）は常滑産で16世紀半ばにおさまるものであろう。陶器鉢（44）は常滑産と思われるが、口縁端部外側がわずかに内反するものの、面を持つまでには至らない。土錘（45）は土師質の紡錘形である。瓦（46）は三ツ巴の軒丸で、珠文が大きくやや潰れた感じで広がる事から近世半ば頃かと推定される。

ＳＤ54（47）　陶器甕（47）は口縁端部がわずかに外反している。壺とも考えられる。常滑産で近世のものか。

ＳＫ39（48）　陶器平椀（48）は内面はすべて釉がかかっているが、外面の底部側半分程は無釉である。瀬戸産で15世紀後半のものと思われる。ただし、混入品である可能性が強い。

ＳＫ42（49～50）　陶器皿（49）は瀬戸産の志野丸皿で17世紀後半のものと思われる。陶器鉢（50）は常滑産で、内面が平滑なのは使用による摩耗と見られ、捏鉢かと思われる。ただし、底部のみなので時期は特定しにくい。

ＳＫ43（51）　陶器皿（51）は、瀬戸美濃産の稜皿で16世紀半ばのものと思われる。




第10図　出土木製品実測図（1：4、W13のみ1：12）

## 5　包含層等の遺物（52～74）

土師器羽釜（52）は口縁部が内湾し、端部が外側に折り返されて面を持つ。15世紀後半のものであろう。土器のうち唯一完形品の土師器皿（53）は岩出地区内遺跡群の編年によれば15世紀代か。陶器小皿（54）は古瀬戸後期、15世紀前半の縁釉小皿である。陶器椀（55～56）はいずれも尾張型の山茶椀であるが、前者は12世紀後半から13世紀、後者は13世紀後半から14世紀のものであろう。陶器皿（59）は、美濃産17～18世紀の菊皿である。陶器鉢（61）は古瀬戸後期のものである。陶器壺（62）は口縁部が外側に折り返されており、常滑産で14世紀代のものと思われる。陶器水甕（63）は瀬戸産の18世紀後半のものである。土錘は（64～71）が紡錘形、（72）が球形で、いずれも土師質である。

石製品では、砥石（73～74）が2点出土した。このうち（74）は、3角柱状のいずれの角にも切り込みが見られ、携帯用に紐を掛けたものと推測される。底部には敲打痕があり、石槌のような役目も合わせ持っていたのではないかと思われる。

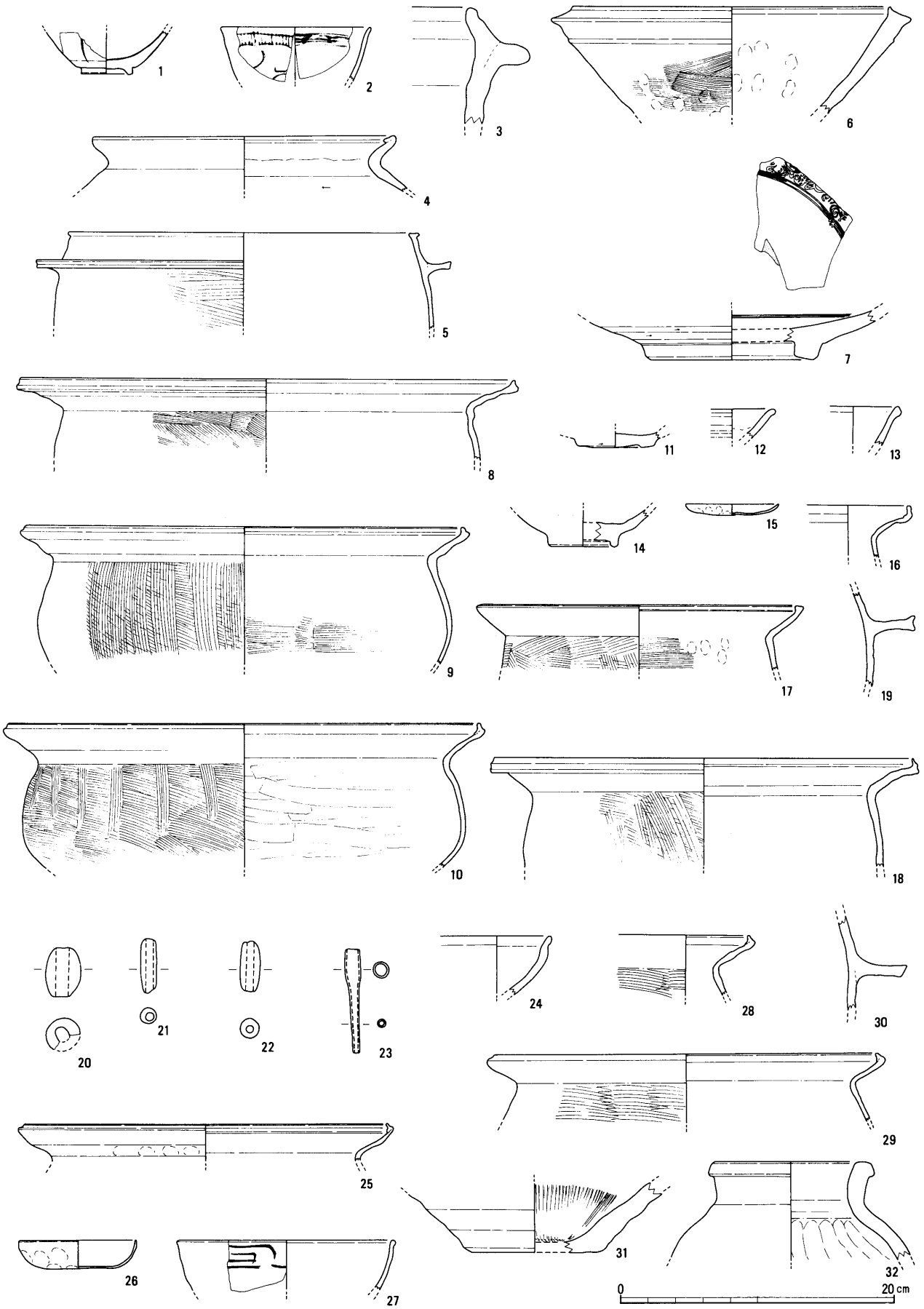
金属製品は、鉄製と銅製の2種類がある。鉄製では釘の他に用途不明（耕作用具か？）の物があるが、完全に錆びついていて特徴を見ることはできず、ま

| 番号 | 器種 | 地区 | 出土位置 | 計測値(cm) | 調整・技法等の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存度 | 備考 | 実測No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器 椀 | A区 | b4 SD29 | － | (外)ロクロケズリ、ロクロナデ、釉 (内)ロクロナデ、釉 | 密 | 良 | (釉)灰色(文様)暗赤褐 (断)灰色 | (底)1/2 | (高台)ケズリ出し 美濃産？ | 007-01 |
| 2 | 磁器 椀 | B区 | b14 SD7 | (口) 11.0 | (外)ロクロナデ後釉 (内)ロクロナデ | 密 | 並 | (釉)灰白 (文様)くすんだ淡青 | (口)1/8 | 染付 | 003-02 |
| 3 | 陶器 甕 | B区 (調査区外) | a13～14 (SD7続き) | (口) 53.7 (鍔) 61.6 | (外・内)ロクロナデ | やや粗 (1～2mm) | 並 | (外)にぶい橙 (内)浅黄橙 | 口縁部 小片 | 常滑産 | 001-01 |
| 4 | 土師器 鍋 | B区 | b12 SD7 | (口) 22.1 | (外)ヨコナデ、ナデ (内)ヨコナデ一部ケズリ | やや粗 (1～4mm) | 並 | (外・内)灰色 | (口)1/8 | (外)粘土接合痕 | 002-02 |
| 5 | 土師器 羽釜 | B区 | b12 SD7 | (口) 25.5 (鍔) 30.2 | (外)ハケメ (口縁)ナデ (内)ナデ | やや粗 (微砂粒) | 並 | (外・内)浅黄橙 | (口)1/4 (鍔)1/3 | | 002-01 |
| 6 | 陶器 捏鉢 | B区 | b12 SD7 | (口) 23.2 | (外)ハケ、ナデ及びオサエ、釉 (内)オサエ及びナデ、釉 | 密 | 良 | (釉)灰赤 (断)灰赤 | 1/6 | 常滑産、歪みあり | 004-02 |
| 7 | 陶器 大皿 | B区 (調査区外) | a13～14 (SD7続き) | (底) 11.8 | (外)ケズリ、釉 (内)釉 | 密 | 良 | (釉)褐灰 | (底)1/8 | (高台)ケズリ出し 唐津産？トチン痕あり | 006-02 |
| 8 | 土師器 鍋 | B区 | a19 SD11 | (口) 36.0 | (外)ハケ(口縁)ナデ (内)ナデ | やや密 | やや不良 | (外・内)灰 | (口)1/16 | | 005-02 |
| 9 | 土師器 鍋 | B区 | a19 SD11 | (口) 32.0 | (外)ヨコハケ後タテハケ (内)ハケ(外・内　口縁)ナデ | 密 | 並 | (外)灰黄 (内)淡黄 | (口)1/4 | (外)スス | 004-01 |
| 10 | 土師器 鍋 | B区 | a19 SD11 | (口) 34.0 | (外)ヨコナデ、タテヨコハケメ (内)工具によるナデ | やや密 | 並 | (外・内)にぶい黄橙 | 1/8 | (外)スス | 008-02 |
| 11 | 陶器 椀 | B区 | b5～6 SD14 | (底) 5.6? | (外)ケズリ出し、ロクロケズリ (内)釉 | やや密 | やや良 | (釉)灰オリーブ (断)灰白 | 底部完形 | 瀬戸産　平椀 | 004-03 |
| 12 | 陶器 皿 | B区 | b5～6 SD14 | － | (外)ケズリ、釉 (内)釉 | やや密 | 並 | (外・内)灰白 (釉)灰白 | 口縁部 小片 | 瀬戸産　輪禿皿 | 004-05 |
| 13 | 磁器 椀 | B区 | b5～6 SD14 | － | (外)釉 | やや密 | 良 | (釉)灰オリーブ (断)灰白 | 口縁部 小片 | 青磁 | 004-06 |
| 14 | 磁器 椀 | B区 | b5～6 SD14 | (底) 4.4 | (外)ケズリ出し、釉 (内)釉 | やや密 | 良 | (釉)灰オリーブ (内)灰白 | 3/8 | 青磁 | 004-04 |
| 15 | 土師器 小皿 | B区 | b5～6 SD14 | (口) 6.8 (高) 0.8 | (外)おさえ (内)ナデ | やや粗 (1～2mm) | 並 | (外・内)浅黄橙 | 1/2 | | 002-03 |
| 16 | 土師器 鍋 | B区 | b5～6 SD14 | － | (外)ハケメ(口縁)ヨコナデ (内)ナデ　(口縁)ヨコナデ | やや粗 (微砂粒) | 並 | (外・内)浅黄橙 | 口縁部 小片 | | 003-03 |
| 17 | 土師器 鍋 | B区 | b5～6 SD14 | (口) 23.0 | (外)ハケ、ナデ(外・内　口縁)ナデ (内)ハケ及びオサエ | 密 | 並 | (外・内)にぶい黄橙 | (口)1/8 | (外)スス | 005-01 |
| 18 | 土師器 鍋 | B区 | b6 SD14 | (口) 30.6 | (外)ヨコハケ後タテハケ(口縁)ロクロナデ (内)ロクロナデ | 密 | 並 | (外・内)にぶい橙 | (口)1/20 | | 005-03 |
| 19 | 土師器 羽釜 | B区 | b5～6 SD14 | － | (外)ハケメ　(口縁)ナデ (内)ナデ | やや粗 (1～3mm) | 並 | (外・内)淡黄 | 口縁部 小片 | | 003-01 |
| 20 | 土錘 | B区 | b5～6 SD14 | (最長)3.6 (最幅)2.7 | (外)ナデ | やや粗 (微砂粒含) | 並 | 明褐灰・褐 | 3/5 | (穴径) 1.0cm (重)10.5g | 003-04 |
| 21 | 土錘 | B区 | b5～6 SD14 | (最長)4.0 (最幅)1.2 | (外)ナデ | やや粗 (微砂粒) | 並 | にぶい橙 | ほぼ完形 | (穴径) 0.6cm (重) 4.1g | 003-05 |
| 22 | 土錘 | B区 | b5～6 SD14 | (最長)3.7 (最幅)1.4 | (外)ナデ | やや粗 (微砂粒) | 並 | 赤褐 | ほぼ完形 | (穴径) 0.5cm (重) 5.6g | 003-06 |
| 23 | キセル | B区 | a4 SD18 | (長) 7.5 | － | － | － | 灰オリーブ | 吸口 のみ | 青銅 | 006-01 |
| 24 | 陶器 椀 | B区 | b11 SD23 | － | (外)ロクロナデ後鉄釉 (内)ロクロナデ | やや密 | 並 | (釉)暗赤褐 (断)浅黄橙 | 口縁部 小片 | 瀬戸美濃産 天目茶椀 | 002-04 |
| 25 | 土師器 鍋 | B区 | b10 SK10 | (口) 28.5 | (外・内)ヨコナデ | 密 | 良 | (外・内)灰白 | (口)1/6 | (外・内)スス (外)ユビオサエ痕 | 014-03 |
| 26 | 土師器 皿 | B区 | a10 SZ12 | (口) 8.4 (器高)2.1 | (外)オサエ後ナデ (内)ナデ | 密 | やや良 | (外・内)灰白 | 2/5 | | 015-01 |
| 27 | 磁器 椀 | B区 | a10 SZ12 | (口) 15.7? | (外・内)ロクロナデ | 密 | 良 | (釉)明オリーブ灰 (断)灰白 | 口縁部 小片 | 青磁 | 015-02 |
| 28 | 土師器 鍋 | C区 | c5 SD34 | － | (外)ヨコナデ、ヨコハケ (内)ヨコナデ | やや密 | 並 | (外・内)にぶい黄橙 | 口縁部 小片 | (外)スス少量 | 007-02 |
| 29 | 土師器 鍋 | C区 | c5 SD34 | (口) 28.0? | (外)ヨコナデ、ヨコハケ (内)ナデ　(口縁)ヨコナデ | やや密 | 並 | (外)灰黄褐 (内)灰白 | 口1/6 | (外)スス | 008-01 |
| 30 | 土師器 羽釜 | C区 | b4 SD34 | － | (外)オサエ・ナデ、ハリ付けナデ、タテハケ　(内)ナデ | やや粗 | 並 | (外)淡黄 (内)にぶい黄 | 鍔部小片 | | 009-01 |

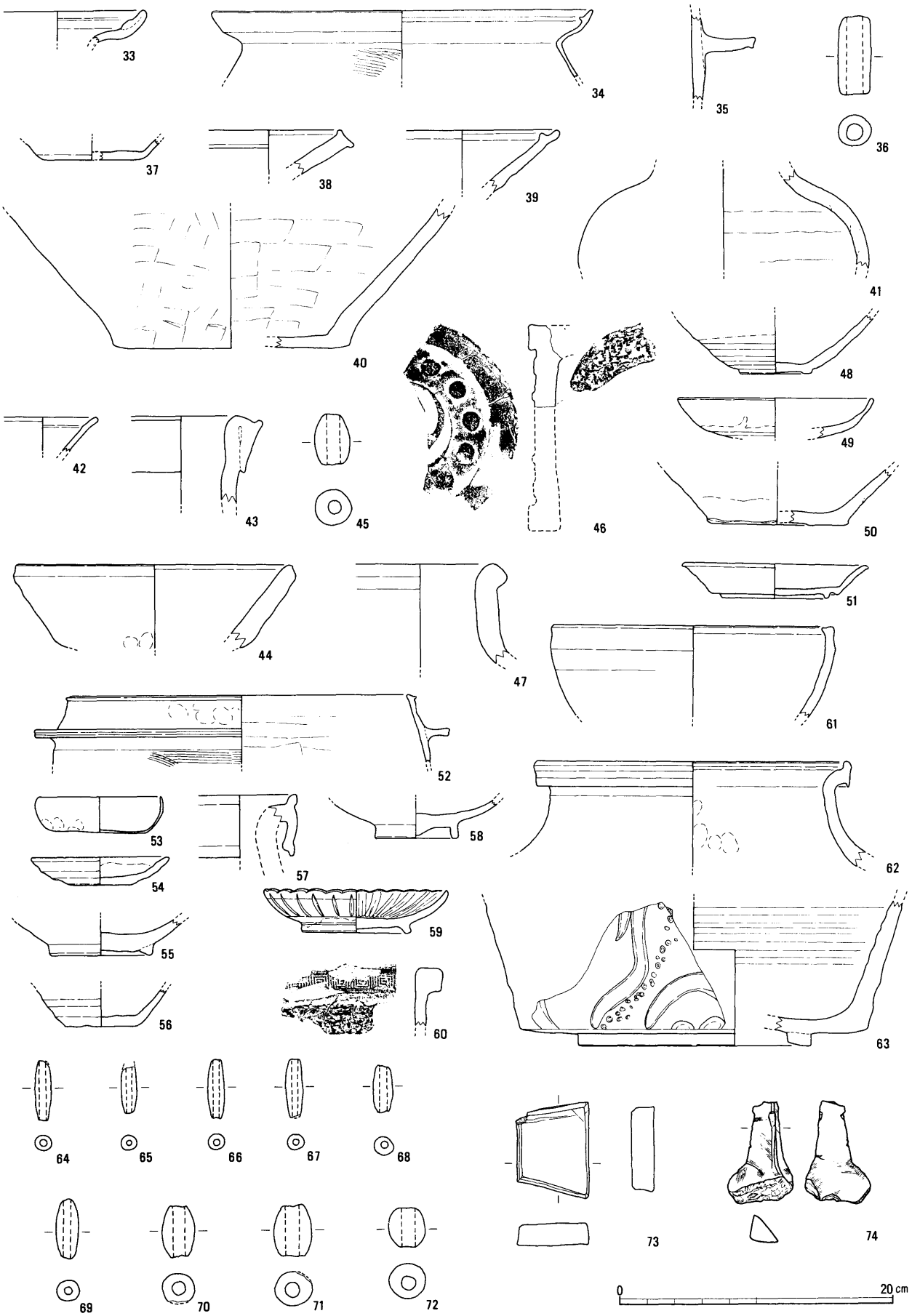
**第1表　出土遺物観察表(1)**

| 番号 | 器種 | 地区 | 出土位置 | 計測値(cm) | 調整・技法等の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存度 | 備考 | 実測No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 陶器 摺鉢 | C区 | c 5<br>SD34 | (底) 10.0 | (外)ロクロナデ後錆釉<br>(内)スジメ | やや密 | 並 | (外)暗赤褐<br>(内)淡黄 | (底)1/4 | 常滑産 | 007-03 |
| 32 | 陶器 壺 | C区 | b 4<br>SD34・35 | (口) 11.0 | (外)オサエ、ナデ<br>(外・内)鉄釉 | やや密 | 良 | (釉)にぶい赤褐<br>(断)明褐灰 | (口)1/2 | 常滑産 | 010-01 |
| 33 | 土師器 鍋 | C区 | c 6<br>SD35 | (口) 38.0? | (外・内)ヨコナデ、ナデ | やや密(微砂粒含) | 並 | (外)灰褐<br>(内)明褐灰 | 口縁部小片 | (外)スス少量 | 011-01 |
| 34 | 土師器 鍋 | C区 | c 6<br>SD35 | (口) 28.0? | (外・内)ヨコナデ、ナデ、ハケメ<br>(内)ヨコナデ、ナデ | やや密 | 並 | (外・内)灰白 | 口縁部小片 | | 011-02 |
| 35 | 土師器 羽釜 | C区 | c 6<br>SD35 | (鍔) 50.0? | (外)ナデ、ヨコナデ、ハケメ<br>(内)ナデ | やや密 | 並 | (外)灰黄<br>(内)灰白 | 鍔部片 | (外)スス | 012-01 |
| 36 | 土錘 | C区 | b 5<br>SD35 | (最長) 5.7<br>(最幅) 2.4 | (外)ナデ | やや粗(1mm以下砂粒・3mm大の小石多含) | 並 | 灰白 | ほぼ完形 | (穴径) 1.2cm<br>(重)29.3g | 011-04 |
| 37 | 陶器 椀 | C区 | b 5<br>SD35 | (底) 6.7 | (外)ロクロナデ、ナデ<br>(内)ロクロナデ、ナデ、自然釉 | 密 | 並 | (外・内)灰白 | (底)1/2 | 尾張型 山茶椀<br>(底)糸切り痕 | 011-03 |
| 38 | 陶器 鉢 | C区 | c 6<br>SD35 | — | (外・内)ヨコナデ | 密<br>(微砂粒) | 良 | (外・内)灰褐 | 口縁部小片 | 常滑産 | 010-03 |
| 39 | 陶器 鉢 | C区 | c 6<br>SD35 | — | (外・内)錆釉 | 密 | 並 | (釉)褐灰<br>(断)灰白 | 口縁部小片 | 瀬戸美濃産 | 010-04 |
| 40 | 陶器 壺 | C区 | c 6<br>SD35 | (底) 17.0? | (外)ナデ、ケズリ?<br>(内)ナデ (外底)未調整 | やや密(1.5mm以下砂粒・5mm大の小石多含) | 並 | (外・内)にぶい赤褐<br>(断)灰白 | (底)1/8 | 常滑産 | 010-02 |
| 41 | 陶器 壺 | C区 | c 6<br>SD35 | (体部最大)21.0 | (外)ロクロナデ、釉<br>(内)ロクロナデ | 密 | 良 | (釉)オリーブ灰<br>(内)灰白 | (体)1/4 | 瀬戸産 | 007-04 |
| 42 | 陶器 椀 | C区 | b13<br>SD44 | — | (外・内)ナデ | やや密 | 並 | (外・内)灰白 | 口縁部小片 | 尾張型 山茶椀 | 013-03 |
| 43 | 陶器 甕 | C区 | b13<br>SD44 | — | (外・内)ナデ | やや密<br>(~4mm小石含) | 並 | (外・内)にぶい橙 | 口縁部小片 | 常滑産 | 013-02 |
| 44 | 陶器 鉢 | C区 | b12<br>SD44 | (口) 20.6? | (外・内)ナデ | やや密 | 並 | (外・内)にぶい橙 | (口)1/9 | 常滑産 | 013-01 |
| 45 | 土錘 | C区 | c13<br>SD44 | (最長) 3.7<br>(最幅) 2.8 | (外)ナデ | やや密<br>(~1.5mm 砂粒含) | 並 | にぶい橙 | ほぼ完形 | (穴径) 1.0cm<br>(重)17.4g | 013-04 |
| 46 | 瓦 軒丸 | C区 | c13<br>SD44 | — | — | 密 | 良 | 灰白・灰 | — | | 012-02 |
| 47 | 陶器 甕? | D区 | a9<br>SD54 | — | (外・内)鉄釉<br>(内)ナデ | やや密<br>(1.5mm~小石含) | 良 | (釉)黒褐<br>(内)橙 | 口縁部小片 | 常滑産 | 010-05 |
| 48 | 陶器 平椀 | C区 | c10<br>SK39 | (底) 5.2 | (外・内)ロクロナデ、釉<br>(外底)糸切り後ロクロケズリ | 密 | 良 | (釉)にぶい黄<br>(断)灰白 | (底)1/2 | 瀬戸産<br>(高台)ケズリ出し | 014-02 |
| 49 | 陶器 皿 | C区 | b14<br>SK42 | (口) 13.9 | (外・内)ロクロナデ、釉<br>(外底)ロクロケズリ | 密 | 良 | (釉)灰白(口縁端部)黒<br>(断)淡黄 | (口)1/8 | 瀬戸産<br>志野丸皿 | 014-05 |
| 50 | 陶器 鉢 | C区 | b14<br>SK42 | — | (外・内)ナデ<br>(外底)未調整 | やや粗<br>(1mm 小石含) | 並 | (外・内)にぶい褐 | 底部小片 | 常滑産<br>(外)接合痕 | 014-04 |
| 51 | 陶器 皿 | C区 | b14~15<br>SK43 | (口)13.2<br>(器高)2.5 | (外・内)ロクロナデ、釉<br>(外底)ロクロケズリ | 密 | 良 | (釉)オリーブ黄<br>(断)灰白 | 1/4 | 瀬戸美濃産 綾皿<br>(高台)ケズリ出し | 014-01 |
| 52 | 土師器 羽釜 | B区 | b12<br>包含層 | (口) 24.2 | (外)オサエ・ヨコナデ、ハケメ<br>(内)ナデ | やや密<br>(~1mm 砂粒含) | 並 | (外・内)浅黄橙 | (口)1/8 | | 017-01 |
| 53 | 土師器 皿 | C区 | 表土 | (口) 9.0<br>(器高)2.7 | (外)オサエ<br>(内)ナデ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | (内・外)淡黄 | 完形 | (底)工具圧痕 | 019-04 |
| 54 | 陶器 小皿 | C区 | 表土 | (口) 10.0<br>(器高)2.0 | (外・内)ロクロナデ、釉<br>(外底)ロクロケズリ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | (釉)灰白<br>(断)オリーブ黄 | 1/4 | 瀬戸産 縁釉小皿<br>(底)糸切り痕 | 019-03 |
| 55 | 陶器 椀 | D区 | a13<br>包含層 | (底) 7.5 | (外・内)ロクロナデ<br>(内)自然釉 | やや粗<br>(1mm砂粒含) | 良 | (外・内)灰白 | (底)1/3 | 尾張型 山茶椀<br>(底)糸切り痕 | 017-04 |
| 56 | 陶器 椀 | C区 | b14<br>包含層 | — | (外・内)ロクロナデ<br>(内底)ナデ | 粗(~ 5mm砂粒・小石含) | 良 | (外・内)灰白 | 底部完形 | 尾張型 山茶椀<br>(底)糸切り痕、板目 | 017-03 |
| 57 | 陶器 甕 | C区 | 表土 | — | (外・内)ロクロナデ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | (外)赤灰<br>(内)にぶい橙 | 口縁部小片 | 常滑産 | 020-05 |
| 58 | 磁器 椀 | C区 | 表土 | (底) 6.0 | (外・内)ロクロナデ、釉<br>(外底)ロクロケズリ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | (釉)明緑灰<br>(断)灰白 | (底) 1/2 | 青磁<br>(高台)ケズリ出し | 019-02 |
| 59 | 陶器 皿 | D区 | b 4<br>包含層 | (口) 13.2<br>(器高)3.2 | (外)ロクロナデ、キザミ、釉 | やや密<br>(~1mm 砂粒含) | 良 | (釉)灰白<br>(断)灰白 | 1/3 | 美濃産 菊皿 | 018-03 |
| 60 | 瓦質土器 火鉢 | A区 | b13<br>包含層 | — | (外)ナデ・ミガキ?<br>(内)ナデ | 密<br>(1mm砂粒含) | 良 | (外・内)灰・灰黄 | 口縁部小片 | (口縁)スタンプ押文 | 018-01 |
| 61 | 陶器 鉢 | C区 | b12<br>包含層 | (口)20.4 | (外・内)ロクロナデ、釉 | 密<br>(微砂粒含) | 良 | (釉)灰白<br>(断)灰白 | (口)1/6 | 瀬戸産 | 018-02 |
| 62 | 陶器 壺 | B区 | b 6<br>包含層 | (口)22.6 | (外・内)ロクロナデ、釉 | やや密<br>(~ 2mm砂粒含) | 良 | (釉)灰赤<br>(断)褐灰 | 口縁部小片 | 常滑産<br>(内)ユビオサエ痕 | 017-02 |
| 63 | 陶器 水甕 (調査区外) | C区 | 表土 | (底)17.0 | (外・内)ロクロナデ、釉 | やや密 | 並 | (釉)灰白<br>(断)灰白 | 底部小片 | 瀬戸産(高台)ハリツケ<br>(外)刺突、凹線、凹点 | 019-01 |
| 64 | 土錘 | B区 | a 5<br>包含層 | (最長) 3.7<br>(最幅) 1.3 | (外)ナデ | 密<br>(微砂粒含) | 並 | 浅黄橙 | ほぼ完形 | (穴径) 0.5cm<br>(重) 4.8g | 016-01 |
| 65 | 土錘 | B区 | b 6<br>包含層 | (最長) 3.4<br>(最幅) 1.2 | (外)ナデ | 密<br>(微砂粒含) | 並 | にぶい橙 | ほぼ完形 | (穴径) 0.4cm<br>(重) 3.7g | 016-02 |
| 66 | 土錘 | B区 | a 5<br>包含層 | (最長) 4.3<br>(最幅) 1.2 | (外)ナデ | 密<br>(微砂粒含) | 並 | にぶい橙 | ほぼ完形 | (穴径) 0.5cm<br>(重) 4.7g | 016-03 |
| 67 | 土錘 | B区 | a11<br>包含層 | (最長) 4.3<br>(最幅) 1.3 | (外)ナデ | 密<br>(微砂粒含) | 並 | 浅黄橙 | 完形 | (穴径) 0.4cm<br>(重) 4.4g | 016-04 |
| 68 | 土錘 | B区 | 表土 | (最長) 3.5<br>(最幅) 1.4 | (外)ナデ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | にぶい赤橙 | 完形 | (穴径) 0.5cm<br>(重) 5.0g | 020-04 |
| 69 | 土錘 | B区 | 表土 | (最長) 4.3<br>(最幅) 1.7 | (外)ナデ | やや粗<br>(微砂粒含) | 並 | にぶい赤橙 | 完形 | (穴径) 0.5cm<br>(重) 9.4g | 020-03 |
| 70 | 土錘 | C区 | b13<br>包含層 | (最長) 3.7<br>(最幅) 2.4 | (外)ナデ | やや密<br>(~1.5mm 砂粒含) | 並 | 橙 | ほぼ完形 | (穴径) 0.9cm<br>(重)15.0g | 016-06 |
| 71 | 土錘 | C区 | c 6<br>包含層 | (最長) 3.7<br>(最幅) 2.8 | (外)ナデ | やや粗<br>(~1.5mm砂粒含) | 並 | にぶい黄橙・淡橙 | ほぼ完形 | (穴径) 1.1cm<br>(重)19.4g | 016-07 |
| 72 | 土錘 | D区 | b 3<br>包含層 | (最長) 2.9<br>(最幅) 2.7 | (外)ナデ | 密<br>(~1.5mm砂粒含) | 並 | 橙・褐灰 | 完形 | (穴径) 1.0cm<br>(重)17.2g | 016-05 |
| 73 | 砥石 | C区 | b14<br>包含層 | (4辺)4.4×4.4<br>×7.0×5.4 | — | — | — | オリーブ黄 | — | (最厚) 1.6 | 020-01 |
| 74 | 砥石 | C区 | 表土 | (最長)6.8<br>(底)4.6×2.8 | — | — | — | 褐灰 | — | 底部 敲打痕あり | 020-02 |

**第2表 出土遺物観察表(2)**




第11図　出土遺物実測図(1)（１：４）

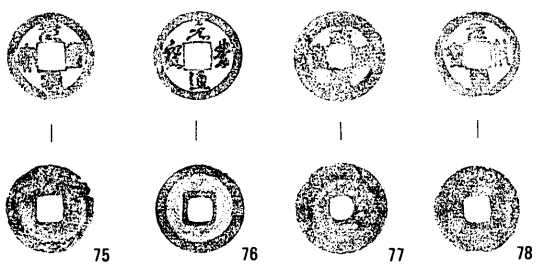



第12図　出土遺物実測図(2)（１：４）

た時期的にも近現代と思われる物で図示していない。銅製はいわゆる輸入銭で、第13図左から、元豊通寶（出土：B区包含層）、同（出土：C区包含層）元祐通寶（出土：C区表土）、元符通寶（出土：C区包含層）の4枚である。

元豊通寶は1078年初鋳、元祐通寶は1086年初鋳、元符通寶は1098年初鋳、いずれも北宋時代である。

第13図　出土貨幣拓影（1：2）




〔註〕土器の編年については、以下の資料による。

＜土師器＞

・伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要第1号』　三重県埋蔵文化財センター　1992年

・伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1996年

＜陶　器＞

・瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要Ⅵ～Ⅷ』　1987～1989年

・赤羽一郎、中野晴久「生産地における編年について」『シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所　1996年

・藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」『シンポジウム「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通」資料集』　瀬戸市埋蔵文化財センター　1996年

・自證院遺跡調査団『自證院遺跡中間調査報告』　1985年

・中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』　常滑市民俗資料館　1986年

・共同研究「中世土器の生産と流通」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994年

なお、三重県埋蔵文化財センター技師の伊藤裕偉、日栄智子の両氏には何かと御教示賜った。

# Ⅴ　結　語

今回の調査においては、C区北端で若干のピット群が見られただけで、建物跡は検出されなかった。

現地の土層は、前述したように海岸特有の砂質であり、居住域としてふさわしい立地条件になりえなかったのであろう。

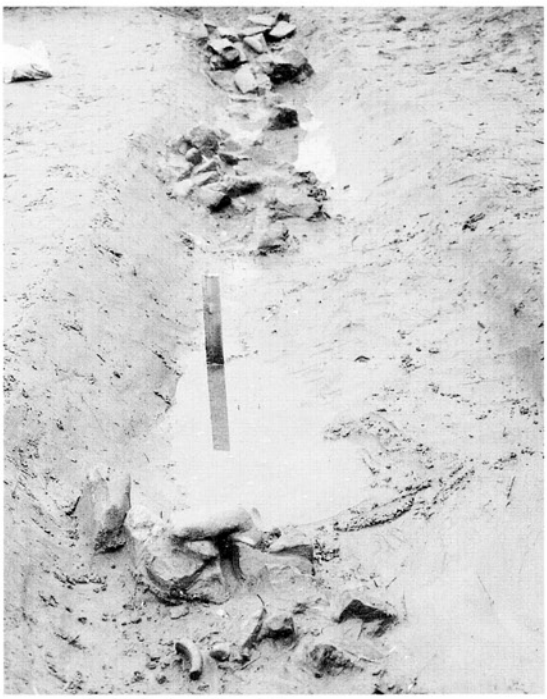
しかし、全く人が立ち入らない地域かというとそうでもない。単独の破片が多く、接合復元できるものは少ないものの鍋・皿・甕などが多数出土している状況から見て、大いに生活との関連を窺わせる。

農具等の出土はないが、現況等を合わせ考えると農耕が、また土錘・貝殻の出土からは漁労が行われていたことは疑いない。

つまり当遺跡は、居住域である集落に隣接する、生産活動にかかわる場であると考えるのが妥当であろう。

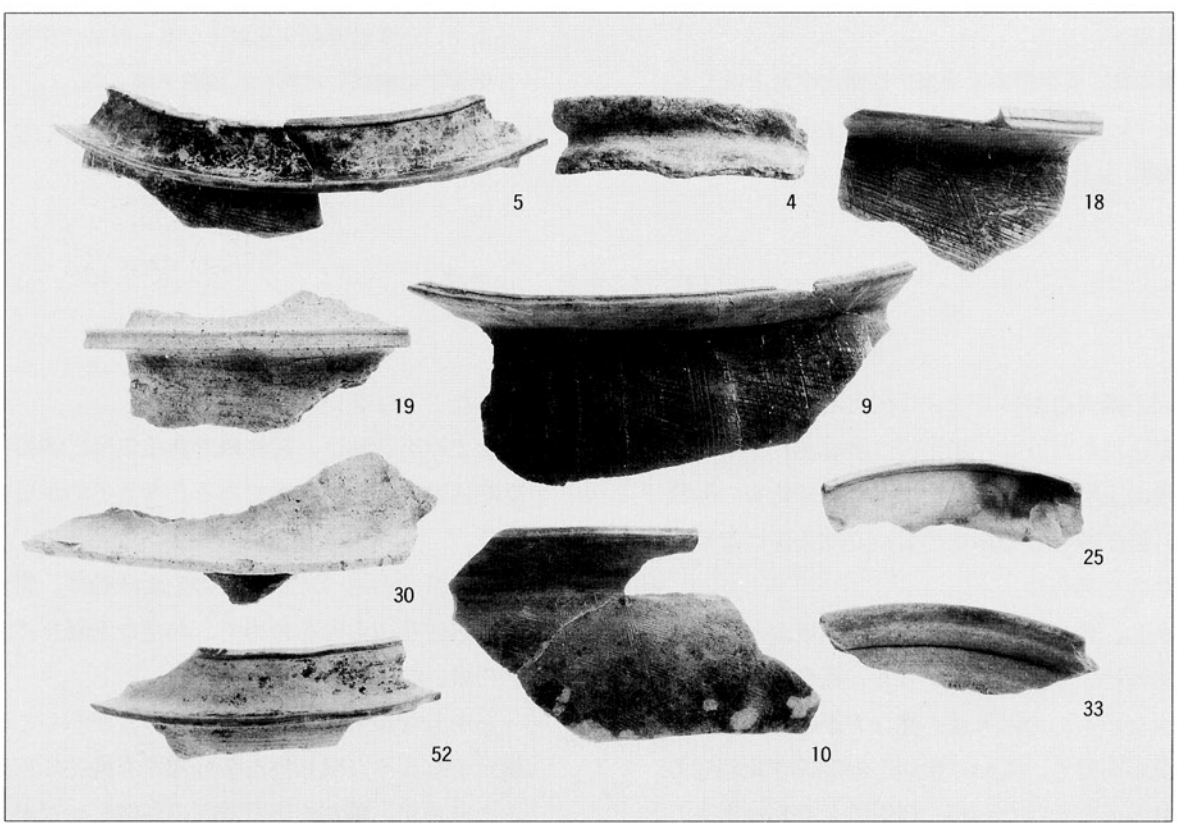
第Ⅱ章でも述べたが、その生産活動は、集落における居住そのものも含めて、非常な困難を伴う「水との戦いの歴史」であった。

しかしながら、ダメージを受けながらもこの地を離れる事なく、限られた平野部を有機的に利用してきた結果が、現在の国府地区の存在につながっているのである。



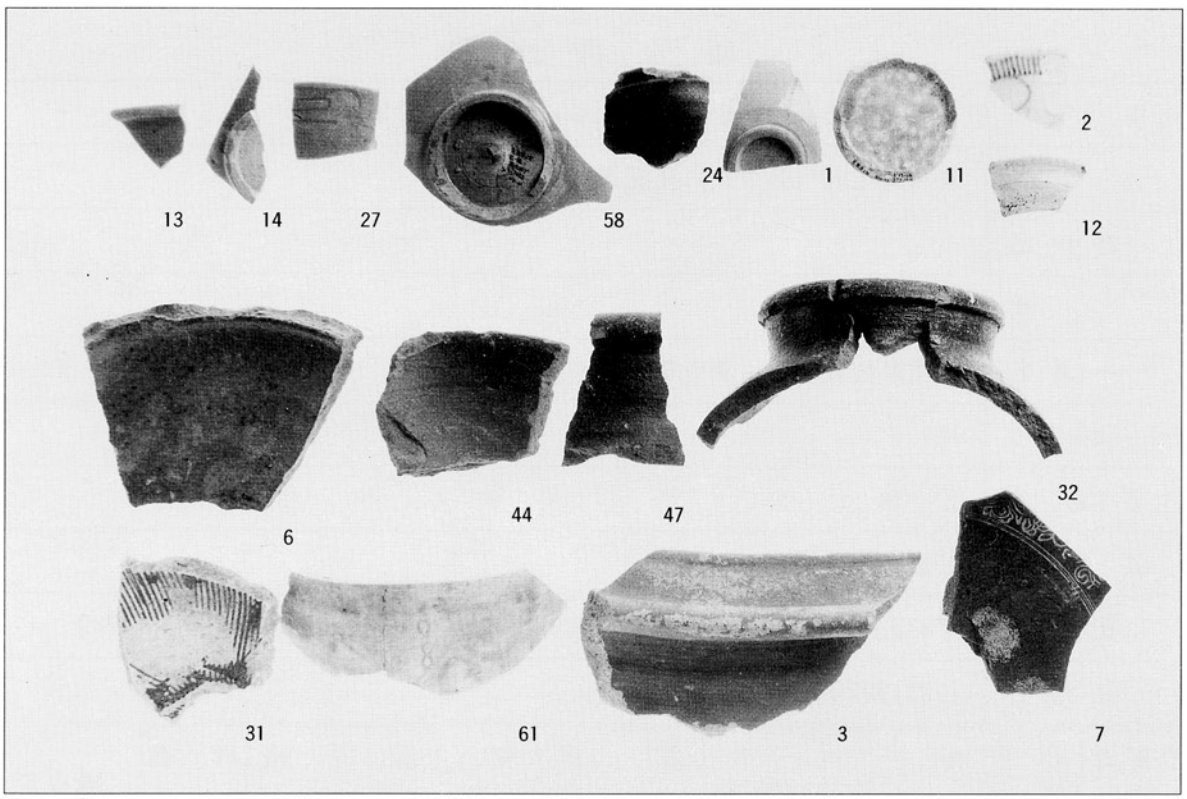
ＳＤ35掘削途中（南から）

ＳＤ37胴木・出土状況（西から）

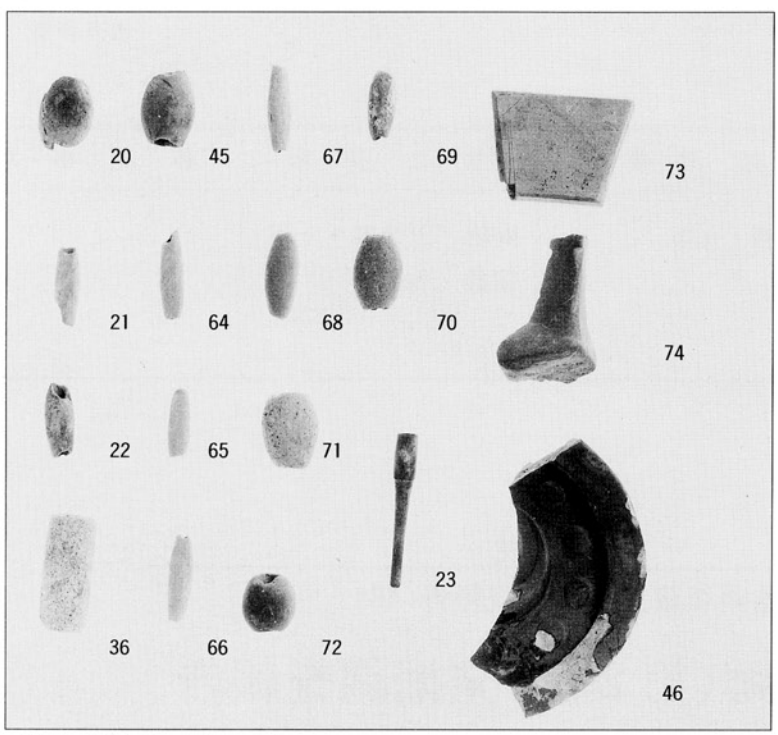



土師器　鍋・羽釜

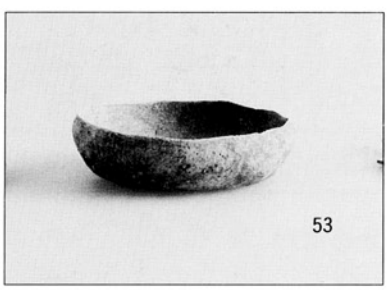
図版２　調査区遺構、出土遺物(1)



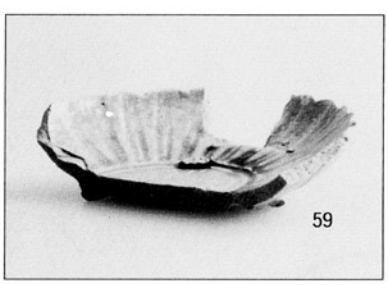

陶器・磁器




土錘・キセル・砥石・瓦




土師器　皿




陶器　稜皿

図版 3　出土遺物(2)

## 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ひがしげと　いせき（だい２じ）はっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 東海道遺跡（第２次）発掘調査報告 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 161 |
| 編著者名 | 佐藤　公・西村美幸 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒515－03 三重県多気郡明和町竹川５０３番地　TEL05965－2－1732 |
| 発行年月日 | 西暦1997年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°　′　″ | 東経<br>°　′　″ | 調査期間 | 調査面積m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ひがしげといせき<br>東海道遺跡 | しまぐんあごちょうこう<br>志摩郡阿児町国府<br>あざしものひがしあしはら<br>字下ノ東・阿し原 | 24524 | 123 | 34°　19′　33″ | 136°　52′　32″ | 19960917<br>19961204 | 1,800 | 主要地方道磯部大王線県単道路改良事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東海道遺跡 | 散布地 | 中世<br>近世 | 溝・土坑 | 陶器・土師器・土錘・銅銭・加工木 | |

平成９(1997) 年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007) 年８月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 161

東海道遺跡(第２次)発掘調査報告

1997．3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　有限会社 第一プリント社